

校区のあゆみ

谷川

豊橋校区史

24

Tanigawa



自然を愛し
自然に学ぶ

谷川





写真撮影：小林春吉氏

豊橋市制施行100周年記念「谷川校区史」

校区のあゆみ 谷川





船形山



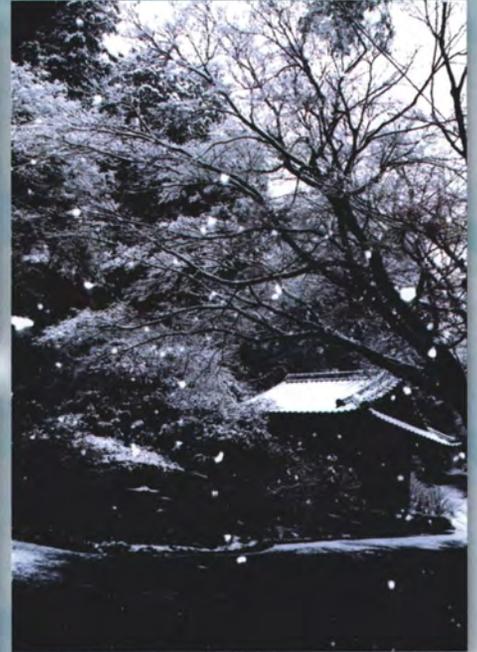
春 まんさく



夏 深山池



秋 もみじ



冬 雪



普門寺



頭谷池



ミカン畑



文化財収蔵庫

鹿嶋神社



雲谷町公民館

中原町



バイパスから見る中原町



旧道



中原町公民館



池面に映る立岩とくじら山



平成18年建替前の神明社



二俣線架橋跡



昔を偲ぶ SL・C58



携帯電話の通信アンテナ

原町



龍守院

原町公民館



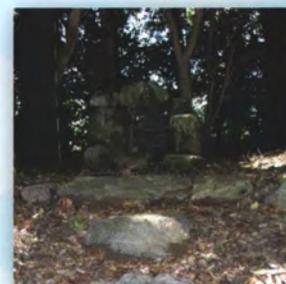
嬉し百度の礼参り



アスモのつつじ



神明社より富士遠望



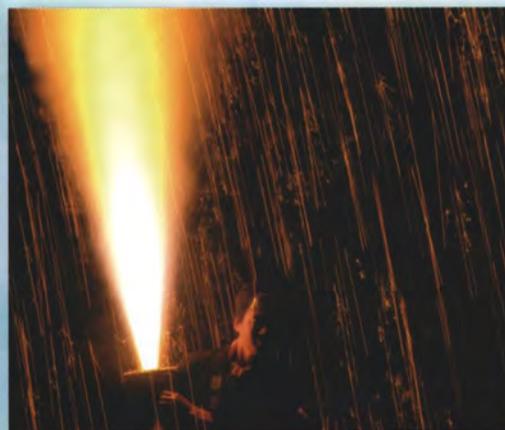
山上様



上西ノ谷



庚申堂



秋の例大祭



昭和38年
クロガネモチ

発刊によせて



平成18年度
豊橋市総代会長

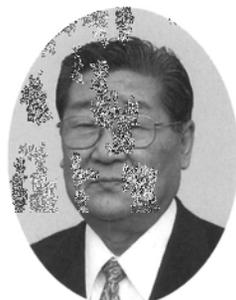
西 義 雄

このたび、豊橋市制施行100周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業に素晴らしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思います。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた100周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思います。今後におきましても、この100周年記念事業を一過性のものに終わらせるのではなく、次の100年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げます。ごあいさつとさせていただきます。



平成18年度
谷川校区総代会長

夏 目 定 寛

谷川といえば、豊かな自然と温かい人情で結ばれた暮らしの「穏やかな原風景」が浮かんでいきます。

かつては、普門寺を支える集落として栄えたり、船形山を居城とした戦国の戦いを乗り越えたりと歴史の重みを感じる地域です。江戸時代には白須賀宿の助郷役に指定され、その発展にも寄与しています。

戦後は経済の高度成長を迎える中で、二川地域の工業化をはじめとして、豊川用水やバイパスの開通など急激な発展を遂げ、谷川校区も大きな変貌をもたらしています。

明治6年に二川義校分教場としてスタートした谷川小学校も、約130年の歴史を刻み、地域の特性を生かした環境教育は特筆に値するものです。

編集委員は、各町から選ばれた16名で、メンバーには郷土史家はいないし、編集の経験者もない素人集団です。しかし、谷川を愛し、谷川を理解し、谷川の将来に夢を託す熱意あふれた仲間たちです。

“温故知新”という言葉は、未来への確かな旅立ちがあってこそ効力を発揮します。今回編集した校区史がその“灯かり”となることを大いに期待し、発刊の挨拶といたします。谷川校区のいよいよの発展を祈りつつ

第1章 自然と環境

- 1 谷川校区の地形と動植物 7
 - (1) 地形と生活環境 7
 - (2) 豊かな自然と保護活動 10
- 2 気候と自然災害 12
 - (1) 温暖な気候 12
 - (2) 自然災害への警鐘 13
 - (3) 自然を生かした農業 14

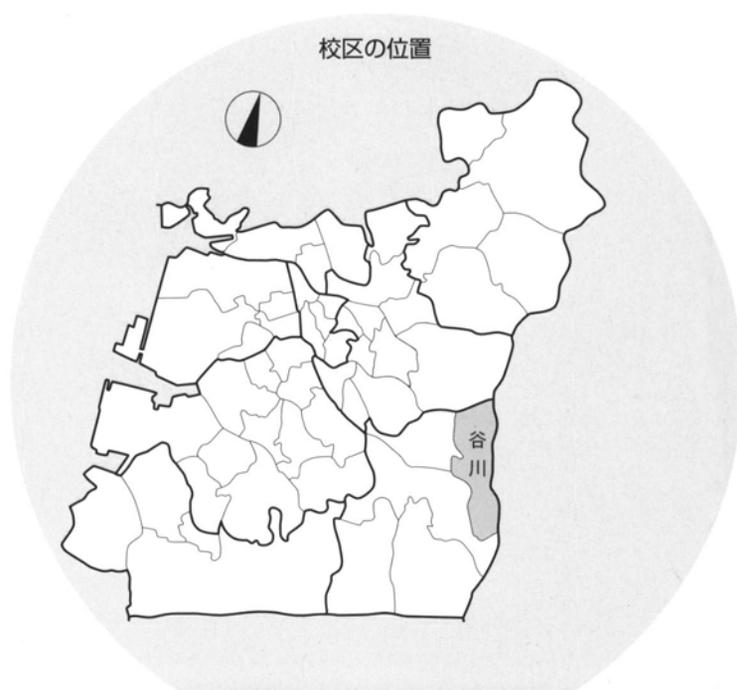
第2章 歴史と生活

- 1 谷川のあゆみ 15
 - (1) 古墳時代から中世へ 15
 - (2) 戦国から江戸時代へ 17
 - (3) 明治から大正へ 19
 - (4) 満州事変から太平洋戦争へ 21
 - (5) 戦後から現代へ 23
- 2 産業の移り変わり 24
 - (1) 農業の変遷 24
 - (2) 工業 26
 - (3) 商業・交通機関 27
- 3 校区の活動 28
 - (1) 安心・安全な町づくり 28
 - (2) 清潔な町づくり 29
 - (3) 防火・防災への対応 30

第3章 教育と文化

- 1 教育のあゆみ 31
 - (1) 学制以前の教育 31

- (2) 谷川分教場の時代 31
- (3) 谷川村立谷川尋常小学校 33
- (4) 二川東部国民学校の時代 36
- (5) 戦後の民主教育 38
- 2 社会教育 41
 - (1) 子供は校区の宝 41
 - (2) 校区の活力 42
- 3 史跡・文化財 43
 - (1) 谷川の史跡 44
 - (2) 谷川の文化財 44
- 4 風習と民話 44
 - (1) 生活に生きる行事 44
 - (2) 民話 46
- ◇編集後記 47
- ◇編集委員名 47
- ◇調査史料例 48
- ◇谷川校区歴史小年表 50
- ◇主な参考文献 52



その合流点は愛知県と静岡県との県境地点である。さらに下流に進み、細谷方面から流れ出る落合川と合流して豊橋港に向かい三河湾に流れ込む。梅田川には中原町において、川上から飛越橋、長瀨橋の2つの橋が架けられ、原町、豊清町との南北交通の要となっている。

雲谷町・中原町の下水道工事も平成13年6月に完成して、生活排水による水質の汚濁も改善され、徐々に透明度も増してきた。川底を眺めると、80cmを超えるほどの鯉が群れをなして泳いでいる。また川底には大鍋の蓋ぐらいのスッポンが首を持ち上げている。川鵜やサギ鳥などが、牛蛙（俗称食用ガエル）や小魚を追っている。まさに生き物の宝庫といえよう。

毎年9月から10月にかけて環境活動の一環として「梅田川ふれあいクリーン作戦」が展開されている。地元企業の従業員や谷川小学校の児童、二川中学校の生徒や校区の人々が一緒になって川の美化に取り組んでいる。



中原の南部を流れる梅田川
 <ふれあいクリーン作戦展開中>

三町の特徴 雲谷町の土地は、山の斜面がみかん園、平地が水田として利用されている。山の斜面に広がるみかん園は昭和45年（1970）から52年（1977）にかけて県営農地開発事業として52.8haにわたって造成されたものである。また山間に見える多くの樹木は自然の宝庫であり季節ごとの美しさは訪れる人々を感動させる。

梅田川を挟んで平地の多い中原町には、みかん園や水田が多い。近年、より市場価値の高いハウスみかんが栽培されるようになってきた。水田は梅田川に沿った所に見られる。梅田川の南側に広がっていた水田や畑は昭和30年代より企業が進出したため、その多くが工場用地に提供された。交通の便がよいこともあって、町内には中小の工場が数多くみられる。

新幹線より南の原町は、海拔50mほどの台地で畑地が多く、温室やビニールハウスを利用した野菜栽培が盛んである。そこでの夏作はメロン、西瓜などが中心で冬作はキュウリ、トマト、エンドウなどである。露地ではキャベツ、ハクサイなどの栽培が主である。水田は県境を流れる境川に沿って帯状に見られる。企業進出は谷川三町のうち原町がもっとも多く、専業農家は非常に少なくなった。

谷川校区の概況

谷川は、南北約5.5km、東西1.3km、面積約5.1km²、794世帯、人口2,272人
 （平成17年度国勢調査による）

ハイキングに 谷川校区は豊橋市の東南
 最適な校区 端に位置し、船形山を背に
 国宝宿る普門寺のある雲谷町、南に下ると
 休日は岩登りの若者で賑わいを見せる立岩の
 麓に広がる中原町、国道1号線の景勝地潮見

坂、潮見バイパスの基点を身近に置く原町、
 谷川校区はこの3町よりなり、全長5.5kmと
 南北に細長い校区である。



- | | | |
|-----------|-------------|-----------|
| 1. 元々堂跡 | 10. 西荒神古墳群 | |
| 2. 船形山城跡 | 11. 谷川保育園 | |
| 3. 元堂跡 | 12. 原中寺 | 19. 立岩古墳群 |
| 4. 大杉 | 13. 谷川小学校 | 20. 立岩 |
| 5. 鏡岩 | 14. 中原神社 | 21. 立岩稲荷 |
| 6. 普門寺 | 15. 谷川校区市民館 | 22. わんかせ岩 |
| 7. 鹿嶋神社 | 16. 四ツ塚古墳群 | 23. 丸山古墳群 |
| 8. 雲谷町公民館 | 17. 中原神社古墳群 | 24. 比舎古墳群 |
| 9. 才の神 | 18. 中原町公民館 | 25. 原神社 |
| | | 26. 原町公民館 |
| | | 27. 龍守院 |
| | | 28. 御霊様 |

(2) 豊かな自然と保護活動

谷川の春夏秋冬 谷川の春は緑。船形山

の常葉の緑に桜が彩りを添えると、木々が芽を吹き始め全野が鮮やかな青葉に包まれる。谷川の夏はホタル。清水に生を受けたホタルは闇の中で幻想的な光の舞を競演する。谷川の秋は紅葉。青空に透かして見える普門寺のもみじは、古刹こまつの尊厳さを一段と引き立てる。谷川の冬は遠望。遥か東方の澄み切った空に、雪を頂いた富士の霊峰がくっきりと浮かび上がる。威容を誇る立岩の麓に広がる谷川は、自然の恵みと人々の和をもとに新たな町づくりが進められている。



立岩春景



錦秋の古刹

自然の営み 美しく大地を覆う緑や草木

の花、山から湧き出る清らかな水、種類が豊富な昆虫、野鳥、水棲生物など四季折々自然の営みが展開される。校区内で身近に見られる動植物を紹介する。

<野鳥> (1年中観察できる野鳥) あおさぎ、うぐいす、かわらひわ、からす、かるがも、きじ、きじばと、けり、こげら、こさぎ、こじゅけい、すずめ、せぐろせきれい、せっか、どばと、とび、ひばり、ひよどり、ほおじろ、めじろ、もず、など

(季節で観察できる野鳥) あまさぎ、つばめ、ほととぎす、など

<川の生き物> (魚類) たなご、どじょう、どんこ、はや、ふな、こい、めだか、など (昆虫類) かわげら、たがめ、やご、たいこうち、など (貝類) かわにな、たにし、など (そのほか) かめ、すっぽん、ざりがに、さわがに、など

<昆虫> (チョウ・ガのなかま) あげはちょう、いちもんじせせり、こみすじちょう、ちゃばねせせり、ひとりが、ほたるが、もんきあげは、もんしろちょう、くろあげは、あおすじあげは、など

(トンボのなかま) ぎんやんま、しおからとんぼ、おにやんま、つのとんぼ、あきあかね、など

(カブトムシの仲間) あおはなむぐり、うりはむし、あおかなぶん、かぶとむし、げんじぼたる、ごまだらかみきり、こくわがた、ななほしてんとう、へいけぼたる、ひらたはなむぐり、など

また、上記以外に(セミのなかま)(バッタの仲間)なども身近で見られる。

<樹木> (1年中葉がついてる木) あおき、あかまつ、くろまつ、さんごじゅ、すぎ、せんりょう、ひさかき、ひのき、やまもも、しい、さかき、など (冬は葉をおとす木) あかめがしわ、いぬざんしょう、うるし、からすざんしょう、くさぎ、くぬぎ、くり、こなら、ごんずい、すだじい、せんだん、たらのき、ぬるで、ねむのき、はぎ、はぜのき、まんさく、やしやぶし、やまうるし、りょうぶ、など

くけもの類>いのしし、さる、たぬき、のうさぎ、はくびしん、むささび、りす、など

<身近な薬草> いちじく (いぼ・べんび・痔) おおばこ (消炎・利尿・整腸・胃腸薬・せきどめ) げんのしょうこ (げりどめ)、たんぼぼ (いぼ・胃腸薬)、どくだみ (おでき・にきび)、ゆきのした (せきどめ・やけど・しもやけ)、よもぎ (切り傷の血止め・虫刺され)、など

マンサク 湖西連峰の一角、神石山の南東斜面にマンサクの咲く地がある。

群生はしていないが2月頃ひとときわ目をひく黄色の花を咲かせる。(俗称山満作)

“ときわまんさく”の群生地は国内でも3ヶ所しか知られていない。その1つが谷川小学校から程近い湖西市神座地区にある。残りの2つは熊本県の小岱山と三重県の伊勢神宮とされている。10年前に突如話題を呼んだ貴重な植物である。開花は4月から5月頃、見学者で賑わいをみせている。



マンサク科トキワマンサク

カタクリの群生地 座談山の山頂より少し下がった中腹の南東斜面にカタクリの花が咲く群生地がある。毎年3月頃可憐な淡い紫色の花を咲かせ、ハイカーの目を楽しませ癒してくれる。自然の草花は大切に、次の世代の人々にも楽しめるようにしたいものだ。

普門寺の大杉 高さ28.1m、幹周りの太さ5.88m、推定樹齢400年以上、昭和43年6月19日市の天然記念物に指定された。春は新緑、秋の紅葉、古刹にあってひとときわ目を引く大杉である。老朽化は避けられなく、樹木医により2年がかりで樹勢回復治療を行った。

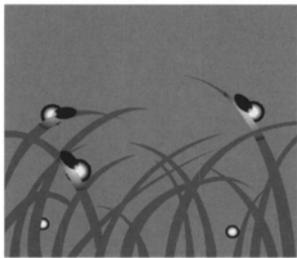
なお、仁王門横のヒノキ、境内のイヌシデ、イロハモミジ、鹿嶋神社のヒノキも豊橋の巨木・名木100選に選定されている。



普門寺の大杉

ホタルの里、谷川 ホタルは清らかな水のある所に育つ。ホタルの乱舞は環境のものさしともいえる。谷川小学校の児童を中心にホタルの里づくりが展開されている。平成14年6月ホタル保存会が発足した。会員は各町総代会、PTA、谷川小学校の職員及び有志の人たちである。児童の活発な活動により学校のホタル園(ピオトープ)で15年初夏、待望の成虫が光り始め、毎日10匹前後の成虫が確認された。現在は次世代を育てるために産卵箱を準備して観察を続けている。校区のあちらこちらでホタルが飛び始め、家族や近所のグループで観察する姿がみられるようになった。

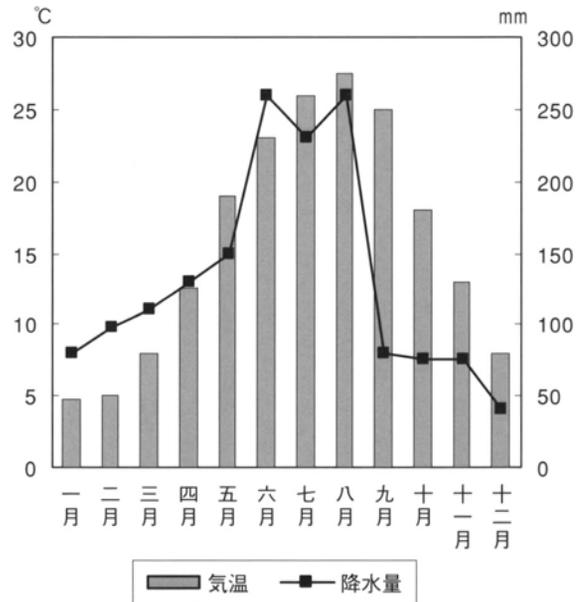
ホタル保存会の目的および活動として重視されているのが、ホタル園ビオトープの活動を通してホタルの観察、育成の支援を行うことである。また広義においては、ホタルが生息する谷川校区の自然環境を守っていくことである。



ゲンジボタル

谷川の常風は、冬季は北西風、夏季は南東風でその交代期は5月頃である。しかし年間を通じて無霜日が230日以上もあることは人々の生活、生産活動上有利な条件である。南東の風が吹くと雨になり、西風になると天気が良くなるのが普通である。

谷川の気温・降水量

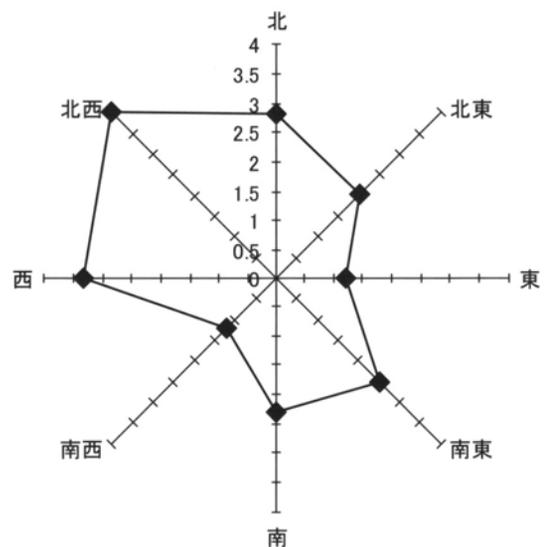


2 気候と自然災害

(1) 温暖な気候

無霜日 230日 谷川校区の冬季は、比較的暖地性 較的温暖である。このことは 特にハクサイ、キャベツ、ネギなどの冬野菜の栽培や温室園芸、みかん栽培にとっては好条件であり、地理的優位性と相まって輸送園芸地帯として地位を占めるに至った理由でもある。年間の平均気温は摂氏15.5度で、雨量は年間1,600mm前後である。雨は夏季に集中するので湿度は高く、冬季は乾燥するが、年によっては8月頃水不足で悩むこともある。

谷川の年平均風向・風力



冬季の乾燥 冬季は晴天が多く、比
と強風 較的乾燥し、湿気が少ない。
 このような気象条件が、戦前の谷川の繭まゆの生産や製糸業にとって有利な条件となっていた。戦後は干し大根を作り漬物にする農業が盛んであった。自然を利用した産業も時代とともに少なくなっている。

屋敷森と三河の空からっ風かぜ

谷川校区の民家の多くは、屋敷森（防風林）をめぐらしているが、これは冬季の強い季節風を防ぐため、防風林の樹種はマキ（俗称細葉）、椎の木、杉、ヒノキがあげられる。

三河の空っ風は、冬季の強い北西風で、空気が乾燥しているので気温のわりには寒さを感じる。

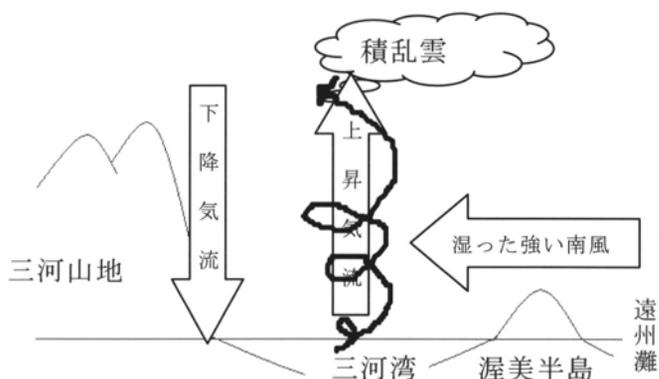
(2) 自然災害への警鐘

台風・土砂くずれ 豊橋を襲った大型台風の記憶として蘇よみがえる

のが伊勢湾台風である。昭和34年（1959）9月26日夜、紀伊半島南端に上陸し、愛知県西部から富山県を通過して日本海に抜けた最大風速75mを記録した超大型で暴風圏が広く、夕方の満潮時とかさなって、堤防の決壊などによる災害は明治以降最大のものであった。

愛知の死者は3,168人、行方不明92人、全壊家屋20,334戸という大災害であった。さいわいに谷川校区での被害は少なかったが、今後心配されるのが、台風などによる集中豪雨である。特に半尻川、境川の氾濫が心配され早急な対策が望まれる。

竜巻の発生 昔の人は、風や雲を従え
と被害 天に昇る竜のように思えて竜巻と呼んだらしい。しかしその正体は非常に力の強い風の渦巻きのことである。



平成11年（1999）9月24日午前11時から午後1時の間に、豊橋市に被害をもたらした竜巻は、積乱雲の下で異なった大気塊が触れ合おうとして、そのとき発生するエネルギーが空気の渦になり、対流現象で上へ上へと昇って竜巻となった。

過去に発生した谷川校区の竜巻は昭39年（1946）7月19日午前6時50分ごろ大岩町地内から雲谷町地内にかけて発生、幅50m、延長約5km、人的被害負傷者2名、民家の被害一部損壊15戸、非住宅の被害全壊2棟。さいわい谷川校区は竜巻の発生を中心から外れていた。

雲谷町をおそった山火事

昭和38年2月18日午後3時頃岩崎町地内の山林から出火、15m/secほどの強風にあおられ、大脇町、雲谷町地内にまたがる通称高山に燃え広がり、山林150haを焼失し翌19日午前11時頃鎮火した。

地震 東海地震はいつ起きてもおかしくないといわれている。昭和 51 年（1976）東海地震説が発表され、平成 13 年（2001）12 月政府の中央防災会議によって東海地震についての最終報告書がまとめられた。静岡西部、駿河湾一帯を震源とする M（マグニチュード）8 クラスの大規模地震に伴う強い揺れ、津波などの被害が予測されるといわれている。

昭和 19 年（1944）12 月 7 日午後 1 時 36 分、M 8 の大地震が東海地方に発生し大被害を与えた。遠州灘地震と呼ばれたが、その後昭和 20 年に出版された中央気象台の報告には東南海大地震と名づけられた。戦時中に起こったので当時の社会情勢から詳細な被害発表はなかった。中央気象台の報告書さえも極秘の印が押されている。

昭和 20 年 1 月 13 日（1945）午後 3 時 38 分 M6.8 の大地震が三河地方に発生した。この地震は昭和 19 年 12 月に発生した東南海地震の 37 日後に起こった。東南海地震同様戦時中の大地震であり詳細は知られていない。谷川の震度は 4 から 5 といわれたが、大きな被害はなかった。

現在豊橋市では、昭和 56 年 5 月 31 日以前に着工された木造住宅の無料耐震診断を積極的に進めている。

（3）自然を生かした農業

美味しい米の 校区の水田は、半尻川
取れどころ 中原川、梅田川、境川などに沿って分布している。耕地整理事業は原町（昭和 33 年～36 年）、中原町（昭和 33 年～36 年）、雲谷町（昭和 36 年～39 年）と実施された。水田面積は 3 町ともほぼ同じで校区全体で 237ha である。

早生種としてコシヒカリ、ミルキークイーン、中生種として、あいちのかおり S B L が

栽培されている。早生種は味が良いが稲が倒れやすい。昼夜の温度差がある地域の米は味が良いといわれ、山を背にした雲谷町は好条件である。収穫量は 10a 当たり 400kg から 600kg ぐらいである。



たわわに実る稲穂

みかん作りの 谷川校区でみかんの栽
移り変わり 培が始められたのは明治の中頃といわれている。大正の始め頃になると、中原町の区有地がみかんの植え付けを目的に貸付られたが、当時は養蚕が盛んであったため発展は見られなかった。この時代に「立岩みかん組合」が誕生した。その後の農地開発事業により増産へと発展した。しかし全国的なみかんの過剰生産、オレンジの自由化などで栽培をやめていく農家が増えた。

ハウスみかんの栽培は、35 年ほど前から導入され現在は 6 戸の農家で 240a ほど栽培されている。出荷量は年間 120t で J A 豊橋を通じ、関東方面の市場に出荷されている。



ハウスミカン栽培

第2章 歴史と生活

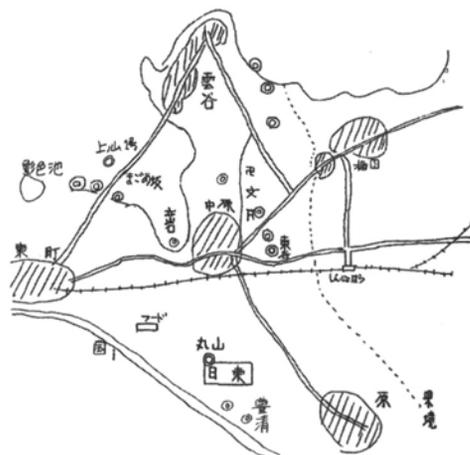
1 谷川のあゆみ

(1) 古墳時代から中世へ

人の定住 この地域の人の定住は雲

と古墳群 谷町と原町から始まった。

谷川校区とその近辺では、35基の古墳群が確認されているが、貝塚（鳥獣魚介類の骨や塵の捨場）などの太古の遺物は発見されていない。先住民の遺物が消えたとも考えられるが、海岸から離れていることを考えると、この地域では、農耕を営む集落から人々の定住が始まったと思われる。



校区内の古墳（◎印）

（昭和39年谷川小学校刊“たにがわ”より）

弥生時代後期（3世紀頃）から古墳時代前期（4世紀ごろ）の台付甕の脚台部と推定できるもの（谷川小学校所蔵）が2点出土している。

我々の先祖が、これ以前から、この地域で農耕を始めたようである。雲谷町の半尻川沿いにある水田は、相当古いと推測されている。原町の境川沿いにある集落や耕地も、この時代のものであろう。

古墳は、JR東海道本線の北側で、影色池から東へ静岡県境までの間と豊清町に点在する。中原町地内では人の定住がこの時代にはまだなかったようである。

谷川地内の古墳で最大のものは、日東電工の敷地内にある丸山古墳で、南北40m、東西36m、高さ4mの大きさがあった。現在、古墳の殆どは消失しているが、古墳時代の後期（6世紀から7世紀前半）谷川小学校所蔵の須恵器7点は、これらの破壊された古墳の副葬品と思われる。馬込池西方、約300mの上ノ山1号墳は、石室が残存している。

普門寺の開山 雲谷町の普門寺は『三州

船形山普門寺略縁起』によ

ると、神亀4年（727）諸国巡錫中の行基（668～749、奈良時代の僧、745年のはじめての大僧正となる）が、自ら聖観音立像を刻み、それを本尊として山頂に寺を建立した。小松原町の東観音寺、田原市の長仙寺、泉福寺などは、何れも行基菩薩の開基として伝わっている。



普門寺の元々堂跡

のちに出る行基焼も、行基の創めたものという。平安時代寺勢盛んになってきた。現在でも開山時の元々堂跡と、のちに再興された元堂の跡が船形山山中に残っている。

広がる古窯址群 農耕が定着し、神仏の信仰が始まると、生活に欠かせないのが、食器・祭器・穀物や酒を貯蔵する甕であったといわれる。雲谷町字ナベ山のナベ山古窯址群や、豊清町の比舎古古窯址群・豊清古窯址群が確認されており、これらから、行基焼や須恵器土器が多く出土している。比舎古古窯址群から出土したと思われる奈良朝須恵器（8世紀前半頃）には焼け釜みや焼けはぜが見られる。このことから窯跡に残された不良品と考えられる。この出土品も谷川小学校に保存されている。普門寺の元堂跡で多くの行基焼が見つかり普門寺の祭事に使用されたと見られる。



校区内から発掘された土器

元CBCキャスター草柳伸一氏(多米町在住)の調査によると、「豊橋文化会館に展示されている一里山古窯群から出土した水差し（急須の大きい物）は蓋の握り手の部分が鳥の形をしていた。これは韓国のものでまったく同じもので、文化の伝承とか、技術の伝達によって作られたというものではないようだ。このことから古墳時代には、一里山に朝鮮半島（新羅、百済など）から渡来した工人が住んでいたと考えられる。」

こうして、この地区にとっての平穏な暮らしは、12世紀中頃まで続いた。しかしこの平穏も、1169年から71年にかけて天台宗の僧との対立（台蜜・東密の勢力あらい）で起きた船形山焼失という異変で一変した。のちに源頼朝の叔父と伝えられる化積上人が、平家追悼祈願のために現在の元堂跡に再興した。

鎌倉街道 平安時代の東海道は遠江国とおとうみのくにの猪鼻いのばな（新居）から細谷、大岩を経て、高師山をとおり牟呂から志香須賀の渡しで豊川を渡り渡津わたつ（小坂井）から遠く平安京まで通じていた。その後、平安時代の後半から鎌倉時代にかけて、東国における政治・軍事経済的発展が続き、これに伴って交通量増大のため、従来の志香須賀の渡し（当時の豊川河口は川幅が広く波風の強い難所であった）に限界が生じ、新たなルートが誕生した。それは白須賀（現在の元白須賀）から、笠子（境川に沿った部落で、古くから雲谷街道とも呼ばれ、普門寺の第二山門があったようで今も門原の名称が残る）に出て、中原から雲谷の普門寺を経て、船形山を越え岩崎の鞍掛神社付近で朝倉川を渡る道であった。

これが鎌倉街道である。「いざ鎌倉」という言葉にあらわされるように、全国の御家人の参集・出陣の道としての性格も強かったらしい。



鎌倉街道の名残り（雲谷町地内）

全国を平定した源頼朝が、建久1年(1190)上洛途中、普門寺に宿泊した。この年、源頼朝から寺領を与えられ、三河七御堂随一といわれた。その寺領は広大で、仁治3年(1242)の証文写しによれば、東は梅田沢境川(三遠の境界)南は旧東海道、西は二川と大岩の境北は霜降岩の北とある。

頼朝伝説

源頼朝が都にのぼるとき、普門寺で3日宿泊してから、鞍馬大明神を通りその乗馬の鞍を奉納して武運長久を祈願したので、それ以来、鞍掛神社と名を改めたと伝えられる。そのとき、頼朝が軍馬を止めたといわれるのがこま止めの桜であり、それは鞍掛神社の東、約100mの小川のほとりにある。

かつては、大きな桜の木であったが、今は枯れてなくなり、そのあとに村人たちが昔をしのいで、新たに桜の木を植えた。

頼朝の乗った葦毛の馬がこの地で死に、愛馬の死を悼んで、なきがらを手厚く葬った。

葦毛(いもう)という地名は、この時の葦毛(あしげ)の馬を埋めた地であるという。

岩崎の東方、山すその小さな池で、頼朝が手を洗ったので、その後、この地を手洗(てあらい)というようになったと伝えられる。

豊橋市教育委員会「豊橋の史跡と文化財」による。

(2) 戦国から江戸時代へ

今川と織田 戦国時代になると、この

の戦い 地区は、三遠両国の国境上に

位置する所から、今川・織田両勢力の接点となった。天文2年(1533)今川方の砦がやぶられ、兵火によって全山ことごとく焼失した。船形山合戦といわれる。このため慶長ごろまで仏像十有余体が元々堂にあった松のあたりに小山のように積まれ、僧侶達も逃亡したままであったと伝わる(普門寺伝)。この合戦で、近在の住民は大きな影響を受けた

と思われるが、被害の程度を示す文書などは残っていない。

のちに、吉田・田原の2城を攻略して渥美郡全部を占領した今川義元は、人心掌握のため神社仏閣を修復し天文17年(1548)普門寺も再興した。江戸時代に入り、寺社は幕府や領主によって信仰をうけ、厚く保護された。特に格式の高い寺社には幕府から朱印地と呼ばれる土地を与えられた。普門寺は慶長8年(1603)徳川家康から朱印領100石を受けた。明治維新で寺領が失われ、神仏分離令により近在の神社の支配権も失い寺勢は衰えたが、山に臨む寺城の景観もよく、古文化財が多いことから、寺を訪れる人びとが絶えない。

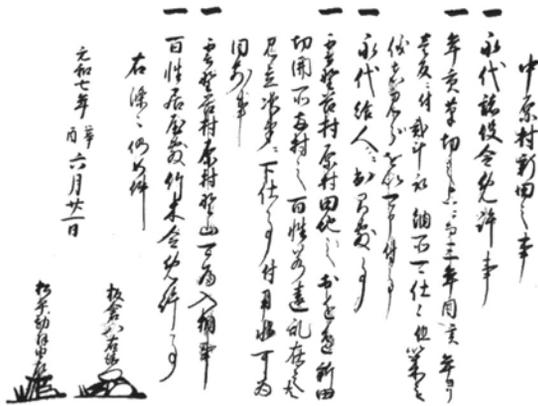


国宝四天王像

中原新田の開発 江戸時代、渥美郡内の新田の中で最も古く、し

かも文献に現れているのは中原新田で、元和7年(1621)吉田藩主松平忠利の時の開発である。当時同藩より出した文書(次ページに掲載)が残存している。

この文面から見ると、①永代諸役を免ずる ②2年間免税とし3年目から1反に僅か2斗の税金でよい ③永代給人に出てはならない、などと随分藩主から優待されている。このように当時の藩主は墾田を奨励し、農業を中心とした産業の振興に努力した。



中原新田の古文書（中原区有）

開発当初の元和8年(1622)の中原村検地帳によれば、名請人50名のうち、原村が30名、雲谷村が18名、他不明2名となっている。つまり原村の農民を中心とし、それに雲谷村が加わり、後には遠州梅田村の農民も参加して開発されたものという。

新田開発の際は必ず検地を行っている。検地は開発の翌年に行われ、貞享3年6月(1686)の中原村新切検地帳(中原区有)に
 田、1町7反3畝13歩
 畑、4町4反1畝23歩
 田畑高合、57石1斗2合3勺とあり、開墾者はここに本百姓として定着した。

新田開発余話

幕府は正保(1644)以前の検地で定めたものを元高と称した。以降変更することなく大名の石高は元高を以って唱えた。新開の土地を有する領主は元高以外の収入があるので、経済上裕福であった。元禄以降、享保以前に検地した新田を古新田とって享保(1716)以降の新田と区別した。中原新田も古新田といわれた。

谷川の当時の 中原新田開発前の谷川の
 大きさ 規模は、慶長9年(1604)の検地高として、雨野谷村(雲谷村)が414石余、原村は278石余とある。

寛永4年(1751)原村差出帳(原区有)による戸数は41戸、174人(男80人・女94人)

安政5年(1858)吉田領戸数調では、雲谷村・58戸、280人、(男129人・女151人)

幕末における石高は、雲谷村・500石、中原村・172石、原村・401石

この当時渥美郡の産物として、薪炭が製造された。このため山林は十分な保護をしなければならないので、給料を与えて山廻りと称するものを置いた。吉田藩御林帳の中に、寛延3年(1750)の山守給米と称するものが示されている。

雲谷村	米4斗2升	太郎右エ門
大脇新田	米7斗8升	長作
中原村	米1斗8升	九平
原村	米1斗8升	久太郎

吉田藩御林として文化元年(1804)10月の調べに
 雲谷村・大脇新田・中原村入会 344町7反歩
 中原村 2町4反歩
 原村 14町2反6畝20歩とある。

<参考>

(1石=10斗=100升=0.1804 m³=約180ℓ)

(1町=10反=100畝=9,917.4 m²=約1ha)

白須賀宿驛の 江戸開幕以後、驛傳の
 助郷村 法を定め、東海道に53

の宿驛を設けた。以前より東海道の往来は頻繁であったが、参勤交代を開始するに及んでますます交通頻繁となり、宿驛の負担が増大し疲弊を呈してきた。この宿驛の疲弊を助けるために、明暦3年(1657)助郷制度が誕生した。助郷とは、各地区から傳馬驛夫を出して、宿驛の助成をするものである。渥美郡や八名郡、宝飯郡の28ヶ村は二川宿へ、谷川3村は、細谷、小島、寺沢、七根、高塚、遠州敷知郡5村と共に、白須賀宿の助郷村となった。

通常、助郷は勤高百石につき、馬2頭、人足2人の割合を以ってその任務にあたった。享保10年(1725)の助郷帳による勤高は、雲谷村・358石、原村・290石、中原村・106石とある。

寛政以後京都との往復が一層煩雑となり更に交通量が増え、勤高の割当も増えていった。加えて宿驛の諸経費の割当(傳馬金)が各村々に課せられた。この傳馬金は首に代えても出さなければならなかった。農繁期といえども若者は助郷役に追われて家業に励むことができず農村はますます疲弊していった。加えて天保の飢饉では三河地方も大飢饉に見舞われた。二川・白須賀付近の道路で、連日8~9人の餓死者があったといわれた。そして慶応3年(1867)遂に助郷騒動が起った。谷川3村が、この助郷騒動にどのようにかかわったかは記録がない。



末広五十三次白須賀 二代歌川広重

(3) 明治から大正へ

近代化の足音 明治4年(1871)7月政府は中央集権確立のために廃藩置県を断行し、翌年ほぼ現在の愛知県が成立した。愛知県はまず行政機構の整備に着手し、県下を15の区に分けた。その15番目

の区に渥美郡が行政区画され、郡役所は豊橋に設置された。

同6年(1872)1月、政府は、士族による軍勢力を廃止して、国民皆兵制度を行うため徴兵令を公布した。しかしこの徴兵令は例外条項を多く含んでいたため、一部の富豪の子弟は兵役免除となり、兵役につくのは貧しい農家の二・三男が多かった。同7年(1874)板垣退助らによって議会政治を実現しようという自由民権運動が始まった。

東海道線の開通に伴い豊橋駅が同21年(1888)9月1日に開業、8年遅れて二川駅が同29年(1896)4月に開業した。近代国家への足音であった。

製糸業と養蚕 明治のはじめ頃、生活を豊かにしようと、農家で茶の栽培を始めたが、この地方の気候に合わず、ほとんど失敗した。そこで、同6年長野県から桑の苗を譲り受け養蚕を始めた。桑がこの地方の気候にあい、養蚕をする人が増えてきたが、製品販売にはまったく未熟であったため、養蚕農家の利益は見るに忍びないものであった。加えて技術不足のため、幾度となく製糸場を創設しても次々に廃業に追い込まれた。

そこで製糸業の先進地である群馬県や長野県、福島県に人材を派遣し技術を学ばせた。この地区の養蚕業は小規模で、つねに原料不足に悩んだが、くず繭(玉繭)から糸を取り出す方法を発見して始めた玉糸製糸は、競争相手もなく、しかも安価な原料という有利な条件で見事に成功した。

同20年代になり、東海道本線が通ると運送店や銀行ができるなど、町の様子が変わり始めた。とくに、生糸や玉糸を作る製糸業が発達し、明治の終わり頃には豊橋の産業の中で一番の生産高をあげるようになった。

谷川村の誕生 大化の改新から平安時

と移り変わり 代の間（一般には701年大宝律令施行の時と考えられている）に三河国渥美郡となりこの地方もこれに含まれた。

明治11年12月28日、雲谷村・中原村・原村が合併して谷川村となった。このときの谷川村誌によると、

- 田 : 132町1反7畝10歩
- 畑 : 32町3反7畝歩
- 宅地 : 7町7反9畝7歩
- 山林 : 77町4反1畝18歩
- 原野 : 6町2反1畝14歩
- 雑地 : 25町3反6畝5歩
- 総計 : 281町3反2畝24歩
- 税金 : 地租税1,414円36銭
- 雑税72円97銭8厘
- 人口 : 戸数138戸 男346人 女336人
- 車馬 : 大六荷車2輛 人力車3輛 馬43頭
- 物産 : 米1,189石3斗 麦 145石8升7合
- 小麦 15石7斗 雑穀 48石7升8合
- 木綿1,364斤 醤油 11石2斗8升
- 木綿織物615反

全村男女共農業を勉む、女は余暇に機織す。

明22, 10, 1	二川村・大岩村・谷川村が併合され大川村となる
明26, 6, 23	大川町に名称変更
明30, 2, 1	大川町から分裂、谷川村に戻る。
明39, 7, 4	大川町・谷川村・細谷村・小沢村が合併して二川町となる。
明39, 8, 1	豊橋市誕生
昭30, 3, 1	豊橋市に吸収合併

青年会の誕生 若い衆仲間とか、若者組

といわれる次代を背負う若者たちの組織ができたのは、江戸時代以前のことといわれている。しかし、明治維新後の

風潮によって、古いものは悉く捨てて省みず、新しいものが次々に採用されていくなかで、幕末頃から助郷役で、生きる意欲を失い墮落しかけていた若者たちは、有識者や為政者から敬遠され、その必要性まで疑われがちだった。そして、これを改善しようとする動きがあまり見られなかった。このような状況のなかで、日露戦争前後に教師などによってこの若者たちを更生しようとする動きが急速に高まった。

雲谷村では、明治27年3月から有志夜学会を設け、教師夏目彌太郎の私宅において数名の有志で、毎夜熱心に勉学を始めた。これが雲谷青年会の発足であった。



雲谷村青年会大正3年の計画

同32年2月に雲谷青年夜学会として村費の援助を受け、年齢15歳以上25歳以下の者を会員とした。夏目彌太郎を会長に、副会長・会計・幹事3名で運営、学力の補充・風俗の矯正・農蚕業の改良を目的とした。基本金を得るために勤労に努め、試作地を設けて会員の研究を助けた。また植樹などの事業を行い、新聞閲覧所を設け新知識の導入を図った。青年夜学会は、中原村・原村でも発足し、当初の会員数は、雲谷村13名、中原村18名、原村15名であった。

(4) 満州事変から太平洋戦争へ

豊橋の昭和恐慌 大正3年(1914)ヨーロ

ッパを主戦場とする第一

次世界大戦が勃発した。大戦中、日米両国は欧州諸国の輸出市場を独占した。このため、本来ならば国内消費される物資も輸出に回され物価が激しく上昇した。世界恐慌の始まりである。そして同12年(1923)関東大震災が、さらに日本の経済恐慌に追い討ちをかけた。昭和4年(1929)ニューヨーク株式の大暴落をきっかけにアメリカ経済は恐慌に陥った。生糸の最大の輸出先であったアメリカの不景気はこの地方の養蚕農家へも影響を与えた。

昭和4年12月に1,120円であった生糸価格は、5年に入って下落する一方であり、675円の繭で620円の糸をつぐむというありさまであったが、同年9月にはとうとう510円になってしまった。大部分の工場は賃金すら払えず休業するところが続出した。小規模業者は生糸生産に見切りをつけ、アメリカから輸入された古絹靴下ほぐしに転業した。これが再生絹糸業である。

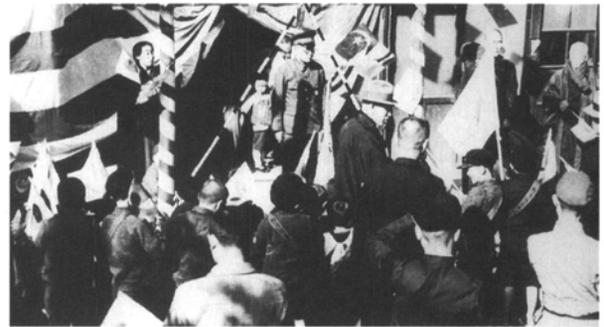
製糸業から始まった豊橋の昭和恐慌は、他のあらゆる産業にも及び、多数の失業者を氾濫させ、ルンペン(浮浪者)ということばが生まれた。こうした不景気から脱出しようと、日本の進路は、満州市場の独占と軍需工業へと向かった。

昭和6年(1931)満州事変が起こり、同12年(1937)7月に日中戦争、そして、同16年(1941)12月、ついに太平洋戦争に突入したのである。

出征兵士の見送り 日中戦争が拡大の一途をたどる昭和13年(1938)4月に国家総動員法が公布され同年5月から施行された。この頃から、多くの若者達が兵役に徴用され、農家の主や働き手までが、召集令状(赤

色の紙が使われたために、通称赤紙といった)1枚で戦地に駆りだされていった。

出征する人は八幡神社や神明社で戦勝祈願をし、妻子・両親や親類・町内会の人たちに盛大に見送られた。若い人が「お国のために」と、立派に挨拶し、二川駅から見送られて戦場に向かった。戦局が優勢なときの見送りは盛大であったが、敗戦色が濃くなってきた頃には見るに忍びないものであったという。



出征兵士見送り風景(昭和12年)

戦時中の生活 こうした状況のなかで、石油・鉄鋼・石炭・綿糸・ゴム製品などの戦略物資は、すでに統制品目になっていたが、戦争が長びくにつれて物資不足は目立ち始めた。なかでも、食糧事情は深刻で、政府が米を一手に買い上げ、昭和16年には豊橋でも米の配給が始まった。11歳から60歳までの男女には、1日当たり2合3勺(330g)の米、1ヶ月当たり200匁(750g)の味噌を配給するというものだった。この配給量は、栄養補給の大部分を米に頼っていた当時ではギリギリの線であった。しかも、後には減配や欠配になった。

太平洋戦争が始まると、物資不足はさらに深刻で煙草・塩のほか、雑穀、芋、豆かすなどが米の代用食として配給されるようになった。このため芋や野菜、その他食料となるものを米と一緒に炊き込んだ雑炊・すいとんを常食として空腹をしのいだ。

海外輸送路を断たれた日本は、兵器を作る原料や金属類が国内では生産できず、国内のあらゆるものを供出させた。各家庭の鍋釜や普門寺の梵鐘^{ぼんしょう}まで兵器に変わっていった。

本土防衛の 昭和19年11月、サイパン
怒部隊^{いかり} 基地を発進した米軍爆撃機B29が、東京へ初めて姿を見せた。以来、B29の空襲は各地で本格化した。第73師団(通称怒部隊)が渥美半島地区の防衛に当たることになり、三ケ日の戦車旅団とともに、上陸する連合軍を水際で迎え討つことになったが、装備は貧弱で、実戦能力はしれていた。兵士たちの日常も、訓練というより陣地の構築に明け暮れた。雲谷の山地周辺には、防空壕や通信壕が今も多く残っている。



今も残る防空壕跡(立岩裏)

空襲警報発令

学校で授業中、空襲警報がよく鳴りました。不謹慎^{ふきんしん}だけれど、空襲警報が鳴ると小躍り^{こおどり}して喜びました。だって！即座に授業中断になって、つまらない授業を受けなくて良いし、大急ぎで家に帰れるのです。家へ帰り着く頃には空襲警報は解除になっていました。終戦まで毎月下記のような警報が鳴った。

	警報	警戒警報	空襲警報
19年12月	15回	12回	13回
20年5月	25回	41回	4回

昭和20年6月18日の夜中、隣の浜松が空襲を受けて燃え上がった。その2時間後、四日市が焼き払われた。「今度は豊橋の番だ！」と思ったという。実際に19日夜半から20日明け方にかけて136機のB29が豊橋を焼き尽くした。そのあとも、各都市が次々に焼け野が原になっていった。広島・長崎の原爆とソ連の参戦、そして8月15日、昭和天皇の玉音放送^{ぎょくおん}で戦争は終わりを告げた。谷川地区はいつもB29や艦載機の空路であったが幸い空襲を免れたのである。

戦没者の慰霊 海外引揚者は600万人と当時報道された。谷川にも戦地から帰った復員者が大勢いた。この復員者の会が各町で結成され、故郷に帰ることができなかった戦没者の御霊^{みたま}を、雲谷町は祖霊社に、中原町は護国神社に、原町は祖霊社にそれぞれ祀^{まつ}った。

雲谷町には鹿嶋神社の境内に、中原町は神明社の境内に、原町も神明社の境内にそれぞれ慰霊碑^{こんりょう}が建立されている。今も春の祈年祭にあわせて、戦没者の御霊にお参りがなされている。



戦没者の慰霊碑

(5) 戦後から現代へ

戦後の暮らし 終戦を告げる玉音放送で
と復興 戦後は始まった。食糧配給は、麦・雑穀・さつまいもなどが主で、主食や生鮮食料品の入手は難しかった。また、海外引揚者や復員軍人による人口増加も食糧不足に拍車をかけた。さらに戦災による工場破壊が生産活動を低下させ、豊橋の工場操業率は、空襲前の6%にまで落ち込んだ。

このような、需要と供給のアンバランスから悪性のインフレーションが発生し、闇市やみいちが生まれた。闇市価格は、17年の統制価格と比べると、砂糖が500倍、米が120倍、石鹼が100倍の値段で取引されていた。闇市とは別に、谷川周辺の農家にもサツマイモ、米、麦、などを求める買出し客があつたを絶たなかった。名古屋、大阪方面から、買出し客が殺到し、1人10貫(37.5kg)を越えるサツマイモのリュックが新所原駅をうずめた。そして中小企業の倒産、閉鎖が続出した。

昭和25年朝鮮戦争が勃発ぼつぱつ、国連軍部隊の基地となった日本は軍需物資の特需に沸いた。しかし26年6月休戦会談が開かれ、和平への気運が高まると繊維相場は大暴落した。もともと軍需工場への転換や空襲によって壊滅状態に追い込まれていた豊橋の繊維産業は他の産業に急速に変っていった。戦後復興の基となった農地改革、豊川用水、工場誘致については次項(2.産業の移り変わり)に譲る。

経済的な変化 農業の改革が進行して、更に工場誘致が進み、専業農家から兼業農家に変化してくると、収入が安定し谷川の暮らしも良くなっていった。谷川の一般家庭に最初にテレビが入ったのは昭和34年だった。それまでは新所原の店舗で、客集めの目的で店先に置いてあったテレビを、多くの人と一緒にプロレスや野球中継を観て

いた。当時は岩屋山で電波が遮さえぎられていたために、受信アンテナは浜松の方角を向いていた。

最初の乗用車は昭和35年に入った。

谷川に最初に入った道具	最初に入った年
オートバイ・カブ	昭和23～24年
石油コンロ	昭和24年
プロパンガス	昭和30年
(テレビ放送開始)	昭和29年
テレビ	昭和34年
乗用車	昭和35年
電気冷蔵庫	昭和35年
電気洗濯機	昭和35年

昭和39年谷川小学校調べ

そして先祖を葬ほうむるための土葬は、昭和51年が最後だった。

経済的な理由と、社交場の役割を持った共同風呂が各村にあったが、各家庭にお風呂ができて社交場としての共同風呂は続いた。しかし昭和50年に最後の共同風呂も閉鎖した。

共同風呂の話

谷川の若い男が、県境を越えて若い娘と恋におちました。やがて2人は結婚しました。その夜、新妻は夫にこっそりと聞きました。「この村のお風呂はどんなお風呂ですか？」夫はこっそりとつぶやきました。

「お前の村と同じだよ。」

新妻はいそいそと共同風呂に出かけました。

女湯の暖簾のれんをくぐり、顔を赤くしながら脱衣場で裸になり、浴室に入りました。

湯煙の向こうに見えたのは、男湯の暖簾をくぐって入った隣の家の旦那さんでした。新妻は「きゃーっ！」と叫んで、家へ逃げ帰りました。それ以来 奥様は「うちの旦那に騙された。」と、今でも言います。

2 産業の移り変わり

(1) 農業の変遷

昔の農業 戦国時代が終わり、江戸時代の平和が続くなかで、村々は発展していったが、農業は米・麦を中心に、ひえ・きび・あわなどの雑穀も生産され、大六車こえおけや堆肥たいひを積んで備中びちゅうや鍬くわを使う肉体労働であった。米麦の反当り収量も今より少なく米で反当り4～5俵であった。しかもその中には、重い年貢負担ねんぐふたんで疲れきった農村の姿があった。凶作の年にも年貢は変わらず、未納の年貢米には利子かんとがかけられた。さらに、この時期には、凶作・疫病・旱魃かんぼつなどが多発した。特に天保の大飢饉きんは悲惨なものだった。米を食べるのは極めてまれで、汁団子・麦・ひえ大根の葉などが常食であった。「百姓は生かさぬように、殺さぬように」という、江戸幕府の方針が明治も続いた。

慶応の頃、石田孝三郎はみかんの木を買い家の庭に植えた。これが谷川の土地柄にあい見事なみかんが実った。明治12年頃から雲谷・中原の台地や山麓さんろくにみかん畑が広がった。

江戸末期に、夏目九郎八(雲谷)は、収入を増やすため二毛作を始め、成績は良かった。明治17年(1884)石田勝五郎(中原)が二毛作を始め、村人も裏作に慣れ、麦・菜種・ジャガイモ・えんどうの冬作を始めた。牛馬耕は明治40年頃からひろまり、馬は牛に代っていった。



牛の鍬起こし作業 (昭和18年頃)

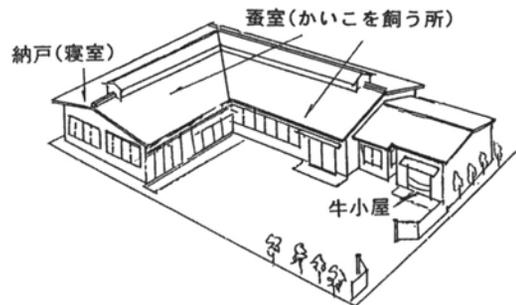
牛の操縦

「牛馬を自在に使いこなせれば一人前だぞ」と先人に仕込まれた。牛の鼻環から胴体の右横に施された手綱を引っ張れば右折。チョウチョウと言って、手綱で右胴をはたけば左折。シッシッは進め。ポウポウは止まれ。後退はアトアト。の5つ位をマスターすれば、何とか操れた。

明治9年中原村に桑を植えた記録がある。明治の半ば“蚕都豊橋”として名をはせた頃養蚕は谷川のほとんどの農家の重要な収入源であり、畑は一面の桑の木で埋まった。蚕かいこが大きくなるにつれ家中蚕の飼育棚でいっぱいになり、寝る場所も隅に追いやられた。えさの桑を摘む仕事に子供も動員され、学校から帰ると大きな桑摘籠を背負い、籠一杯摘んでは、小遣銭を貰うのが唯一の楽しみだった。

明治12年、中原の山本仁八は、娘を浜名郡岡崎村に派遣し製糸業を見習わせ、翌年家で製糸業を始めた。以降谷川の各地で製糸業を始める人が増えたが、ほとんど失敗した。

蚕を飼うには大きな家が要る。養蚕が盛んになると家を改築する人が増えた。家は四間よくまや六間もあり、2階にも蚕を飼った。



牛と蚕を飼っていた頃の農家

太平洋戦争が始まる頃から生糸が売れなくなり、食糧増産のために畑は桑から芋に代わって質より量をめざしていった。

小作農から 明治以降、日本は急速

自作農へ に資本主義的發展を遂げたが、農業では旧態依然とした零細家族経営が多く、農民は田畑の全部または一部を借り受けていた。昭和21年(1945)2月第1次農地改革が、同年10月第2次が施行され、次の3項目が決定した。

① 不在地主所有地の全部と在村不耕地主の所有地の1町歩を越える部分を政府が買い取り小作者に安く売り渡すこと

② 買取売り渡しの計画は、公選の農業委員会で作成すること

③ 残った貸付地の小作料は金納とし、最高小作料率を決めること

解放した農地は農家総数の75%の農家に売り渡された。耕作民本位の農地制度が実現し、農業生産力発展と農村民主化の端緒となった。

区画整備事業 昭和3年(1928)初め、川合儀三郎、加藤藤作ら7人

を発起人として62町歩の御料林(国有林)の払下げを受けた。翌4年(1936)開墾助成事業として工事に着手、同13年(1938)4月耕地整理事業に切り替えた。組合員は129人に増え、地積56町4反余の工事が開始された。

戦時中の資材不足を克服し、終戦までに、その大半を完了した。現在の日東電工・レンゴウの工場用地を中心とした一帯である。

以後の区画整備事業を各町別に列記する。

雲谷町 昭和36～53年(1961～78)の事業
団体営圃場整備、他 計114.8ha

中原町 昭和33～39年(1958～64)の事業
アラタ、平山、中島地区、他 計143.0ha

原町 昭和36～平成4年(1961～92)の事業
塘上、塘下、東田、西ノ谷、他 計102.9ha

この区画事業で殆どが1区画1,000m²(1反)に整地され農作業も効率的になった。

その後、市が「工場設置推奨条例」を制定し工場適地を指定するなど、企業誘致の条件整備に乗り出した。のちに原町・中原町は工場地帯に変貌する。

当時の土地の値段

昭和35年、企業は坪750円で買い上げた。牛馬から機械化移行の時期にも重なり、こぞって耕運機およびテレビと付属品を購入したら、無一文になってしまったという逸話もある。しかし30年後の平成元年にはバブルの影響もあって100倍になった。

豊川用水 昭和2年(1927)4月東三河
地元有力者の努力により、農林

省の「大規模農業水利調査計画」として初めて取り上げられ、昭和36年(1961)より19年の歳月を費やし、総工事費448億の巨費を投じ完成した。

紆余曲折を経た豊川用水は、昭和43年(1968)4月に通水を開始した。温暖な気候と都市近郊地帯としての立地条件にも恵まれ、水不足に悩んできた人々に新しい農業への挑戦と勇気を与えた。豊橋市における昭和35年と45年の農業粗収入を比較すると、米91%、野菜242%、畜産311%と驚異的な伸び率を示している。これらの増加は技術革新もあるが、豊川用水の効果といっても過言ではない。



豊川用水東部幹線

二川チェック

地元農協の設立 二川農業協同組合（以下農協という）の歴史は明治40年に保証責任大岩信用購買組合が発足したのが始まりであったが、この組合は10年で解散した。その後、農協法公布とともに昭和23年(1948)に、二川宿本陣跡を事務所として、二川町農協が発足し、同25年には中原支所が開設された。同36年農協合併助成法が施行され、同46年豊橋南部農協、平成9年豊橋農協となり、露地野菜を主体とした農業の近代化を進めた。

産直プラザ 南部農協第1事業所管
二川産直市 内(二川・細谷・小沢)の、地元兼業農家対策として平成4年(1992)、農協二川支店内で会員を募集し“フレッシュ100円市”が週1回の開催でスタートした。

初年度販売額、751万円(会員35人)であった。平成10年(1998)度より年間売上高6千万円を超え、会員数も80人となった。平成15年(2003)3月28日、現在の“産直プラザ二川産直市”内に産直市コーナーとして入店した。新規会員も募り100人を越す規模となった。現在は週6日の開催となって売り上げも1億円をこえた。



産直プラザ二川産直市の賑わい

廉価と鮮度が人気を呼び、連日開店前に長蛇の列ができています。県内外の農協関係者などが経営状況視察に多数来訪されており、今後のさらなる発展が期待できる。

(2) 工業

企業の進出 昭和29年(1954)市は「東三河工業整備特別地域」の指定を受け、工場適地を指定する企業誘致条件整備に努め、日東電工・レンゴーなどの進出により、中原町は25ha、原町は50ha余の丹精込めて耕作し続けた農地を提供した。特に原町は区画整理で耕作し易くなった100ha余の農地も半減した。

企業の進出によって住民の日常生活にも変化の兆しが現れた。兼業農家が増加したため、従来の農収のみで生計している農家は各町とも5戸ほどになってしまった。さらに朝夕の通勤車の大渋滞と、日中の時間帯でも資材、製品を満載した大型車が、地響きを立てて通過するようになった。



朝の通勤時ラッシュ状況(原町地内)

地元との共生 谷川校区への進出企業は地元に変好意的で「交通安全週間」に企業ぐるみで全面協力してくれたり、町役員の工場見学や、毎年の事業所祭の住民参加などもある。

地元民の雇用が減少し、代わりに派遣社員が増えているが、地元民の雇用をおおいに期待する。進出企業が増え、農地や林野の減少が顕著である。土地を大切にし、有効に活用されることを希望する。

(3) 商業・交通機関

二川バイパス 昔の旧街道は、常時車の往来で渋滞したが、二川バイパス開通後交通事情は緩和された。しかし近年、湖西市側の主要南部幹線道路と、県道中原・東細谷線が、日東電工北角でつながり、県境を越える車両通行が増えたため、また渋滞が頻繁に起るようになった。しかも半数以上は、隣県浜松ナンバーである。

企業誘致のピーク時ごろまではすべての地域で道路整備が隣県より優れていたのが、近年随所に逆転現象が見られる。静岡県は東が神奈川、北は山梨・長野、西は愛知に接している地形のため、特に東西両県境自治体には県境対策費として特別予算計上を図り、これに基づいて整備が急ピッチで実施されている。



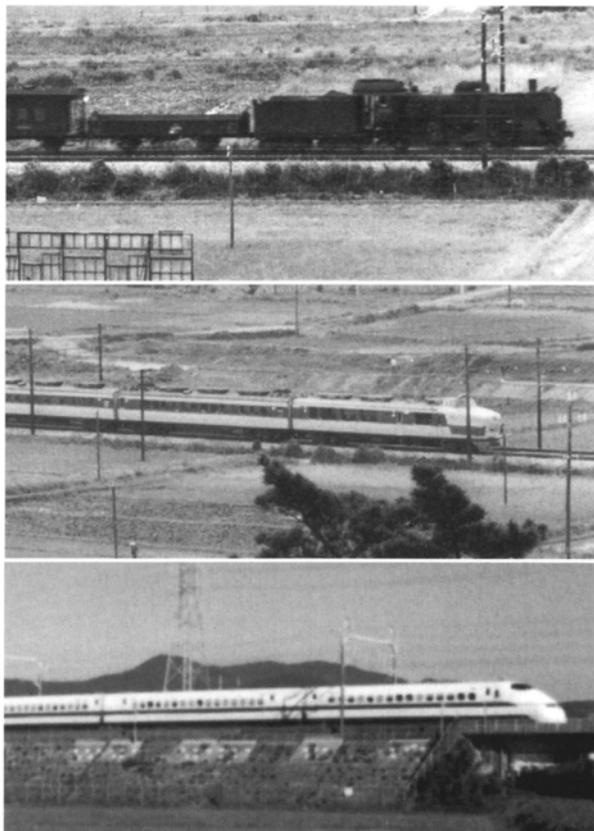
二川バイパス中原歩道橋上より
県境方面を望む

バイパス沿線にはさまざまな店舗が営業していて、その全てに隣県ナンバーの客が多い。谷川・二川を始め、東三河と湖西市は完全に同一経済圏のようになってきた。そのほか、主要交通機関では校区南側が国道1号線に接し、中央部の中原町にはJR東海道線が走り、その中間に新幹線が通っている交通機関に恵まれている地帯でもある。

鉄道の思い出 昭和11年(1936)から半世紀間、地道に活躍した二

俣線(初期は三ケ日線)が谷川を通っていた。二俣線は戦時中に東海道線の鉄橋への爆撃を想定し迂回路として敷設された路線である。豊橋・三ケ日間の23.1kmを運行、51年の歴史を歩んできた。当時は2両連結の蒸気機関車(SL)C58を運行。真っ黒い煙を吐き、3軸の大車輪を回転しながら走る勇姿は、20年後の現在でも鮮明な記憶として残っている。

39年(1964)10月登場の丸い鼻立ち「O型新幹線」とSLとが並行して走り、新旧の時代対比が、大変印象的であった。62年(1987)3月、二俣線の名称は、天竜浜名湖鉄道に改称され、新所原駅を起点として掛川駅間のディーゼル客車のみの運行となった。



上 新所原・二川間を走るSL

中 SLと同じ線路を走る「つばめ」

下 東海道線の南側を走る新幹線

3 校区の活動

(1) 安心・安全な町づくり

子供を 最近、テレビ新聞紙上で

守る運動 子供の事件・事故が、毎日のように報道されており、子供の安全が脅かされている。この谷川は、昔から平穏な地区として暮らしてきたが、最近ではそうっておられなくなってきた。子供達は地域の宝であり、校区民で子供を守るという強い認識が求められる。

二川中学校区には総代会が中核となっている健全育成会の下部組織として「二川子供を護る会(以下護る会)」がある。谷川校区の青少年健全育成会は、この護る会と連携して活動している。「地域全体で子供を守る」を合言葉に、他人の子供にも関心を持ち、危険と感じたら、全校区民で温かい救いの手を差し延べる運動を行っている。

谷川は、普門寺を訪れる客、湖西連峰へのウォーキング客、地域外の人々の通勤通過車両が多い。このためどんな人がこの校区を訪れているか知っておく必要がある。犯罪を犯す人は顔を見られることを嫌がると思われる。そこで谷川校区では、地域内を通る車を見かけたら、運転席を見て軽く会釈し、世間の人に挨拶をする運動を不審者対策として行っている。

お年寄りや孫との交流の場を通じて、健全育成、安全指導などを行うため、夏場の期間、休日に公民館を開放して、子供やお年寄りが集まって話し合いをする。また小学校の体育館で民芸教室(3章で説明)も行っている。子供が危険を感じたら、すぐに逃込めるための子供110番の家の設置、町役員・PTA各種団体のパトロールと連絡会の場を設け、校区内での事件・事故のゼロを目指し具体的な対策案のもとに行動している。

通学時の 谷川校区は県境にあり

安全対策 豊橋と湖西・浜松などを往来する車両が多い。県境をまたぐ通勤車両がバイパスの渋滞を避け、迂回路として通学路を通る。下校時間帯にも資材を工場に運ぶ大型車両が道路一杯に幹線道路を通過する。

この地区には田畑や工場が多いため生徒数の割には面積が広く、小学校及び中学校への通学は比較的遠い。通学路の整備を関係先にもお願いしても、辺境と児童生徒数が少ないため、費用対効果を楯に、なかなか進まない。他の校区には無い頭の痛い問題だ。このため登下校時の交通事故、不審者の事件を防止するよう、校区をあげて努力している。

登下校時間帯に合わせたウォーキングや犬の散歩、買い物や用事で外出時、農作業などの仕事の時も遠くからでも子供の様子を見守り、声をかけるようにしている。また、主要通学路での交通安全旗の旗立て、交通整理と指導、シートベルトの着用指導を付近の住民、各種団体、町役員などで定期的に行っている。



地域ぐるみの安全対策実施状況

(2) 清潔な町づくり

落とすな 『ゴミを捨てる人はゴミが

拾え運動 見えない』という。犯罪者は、汚れた町や、管理されていない町を狙って入り込んでくると思われる。

この地区には多くの企業の進出があり、この企業に勤める人達の通勤車両や、豊橋方面中心部から湖西方面に勤める人の通過車両がバイパスの混雑を避け、出勤時間に遅刻しないように校区内を猛スピードで駆け抜けながら、一部の人がゴミを運転席の窓から放り投げていく。また、工場に勤めていた労働者が引越しをする時、大量の家財道具・タイヤなどを周辺の山に不法投棄していくことがある。



捨てられたタイヤ

谷川校区では、“ゴミを落とさない、ゴミを見たら拾う”を合言葉に、犯罪者が入り込みにくい町にするため、町民全員で住みよい町づくりに取り組んでいる。

奉仕活動の 校区内では、各種団体が

広がり 奉仕作業を行っている。

立岩会(老人会)では現在町内にある6ヶ所の公園、緑地帯の草取りや樹木の剪定を年3回の割合で作業を行っている。これにより季節ごとの花の観賞ができ、主要道の見通しも良

くなり交通事故の防止にも成果をあげている



樹木の剪定奉仕活動

更生保護女性会では、立岩公園の花の植え付けから管理までを精力的に奉仕している。お陰で公園に遊びに来られる人や通行者から“綺麗だ、心が和む”という声が多い。好美会(有志の集まり)他、ボランティアグループによる雲谷町、中原町、原町の各神社で月2回程度の境内の草取りや清掃をしている。町民はすがすがしい気持ちで参拝できることに感謝している。今後ボランティア活動がさらに広がっていく校区にしていきたい。

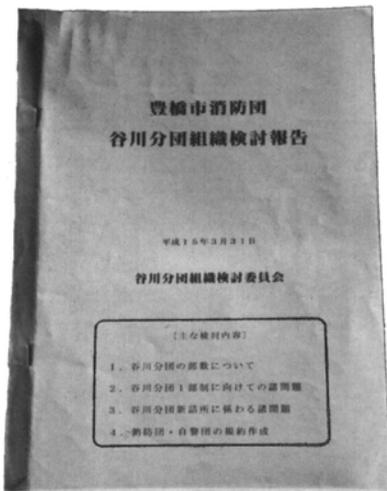


神社の清掃活動

(3) 防火・防災への対応

消防団 消防団は自らの手で災害

検討委員会 から郷土を守ろうと、住民有志により組織化されているが、近年の都市化現象に伴い、住民の連帯意識の希薄化と若年層の減少化など大きな変化がおきている。この校区でも例外ではなく、自営業者の減少就業先の遠距離化、校区民の消防団に対する認識不足問題も深刻となっており、団員の確保問題に毎年のように非常に苦勞してきている。このような状況を脱却するため、2年間かけて校区で検討した結果、常設消防の近代化や防火設備の充実を考慮し、現在1分団3部制(34名)を、1分団1部制(17名)に移行することにより、新しい時代に即応した精鋭の消防団を実現し、団員の確保の問題も含め解決していくことにした。



自主防災会 谷川校区は後ろに山を背負

い、川があり多くの工場がある。消防団を縮小すると、災害発生時の住民の不安がつもの。そこで各町の自主防災会(自警団)を組織化し、住民参加の地域防災体制に取り組んでいる。将来には、さらに防災に対する意欲を高め知識を習得し、校区にみあった中身のある活動部隊として強化し『災害に強い人づくり、町づくり』を目指していく。



初期消火訓練

防災マップ 発生が懸念されている東

の作成 海地震に対し、被害の軽減を図るため被害予測に沿った準備態勢づくりをしておくことが重要である。一人ひとりの防災意識の向上、地域全体の防災体制の強化が必要である。さいわいなことに、この地域内では津波の心配はなく、地盤の液状化も低い予想なので身近でできることから地域防災地図づくりをしていく計画である。

- (1) 避難場所
- (2) 高齢者世帯・独居世帯
- (3) 出水・地滑り危険箇所
- (4) 地域内の危険と思われるブロック塀
- (5) 停電時汲み上げ可能な井戸
- (6) 不審者が出そうな場所
- (7) 交通上危険な場所

などを調査してマップ化する。校区内の現状を把握しながら具体的な対応策を考えている。

第3章 教育と文化

1 教育のあゆみ

(1) 学制以前の教育

藩校と寺子屋 江戸時代における吉田藩の教育は、武士は藩校、庶民は寺子屋において行われた。藩士の子弟のうち、男子はすべて藩校であった時習館に入って武士としての教育を受けた。年齢8歳から18歳までの男子が漢学・算術・筆道・洋学・普通学の5科目の外に、弓・剣・柔等の武芸を加え、文武両道を教授させた。ところが、藩士の子弟でも女子は藩校に入ることが許されなかったため、各自の意志に従い、教養ある藩士の妻女から教えを受けていた。学習内容は読書・手習・裁縫である。

一方、庶民の子弟は寺子屋で教育を受けた。寺子屋とは、庶民の子弟の教育をする場所を総称したものである。ここでは、教育者を師匠、通う子供は筆子と呼ばれていた。師匠になるには資格は不要であったが、職業を分類すると僧侶が約5割で、次は神官、庄屋、医師などであった。学科は、読・書・算が主なものだった。明治初年における寺子屋の数は、豊橋地方で150から200程度あり、谷川で3ヶ所、二川大岩で10ヶ所ほどであった。

谷川の寺子屋 谷川の寺子屋は、普門寺（雲谷）、原中寺（中原）、龍守庵（原）の3ヶ所にあった。寺子屋に入る年齢は7歳から8歳ぐらいだったが、就学率は低かった。特に、女子の場合は極端に低かったという。科目は、普通に読み、書き、ソロバンといわれるが、習字が主だったようだ。

普門寺では、鐘楼門をくぐった左側の建屋で勉強した。古老が若かった頃には、寺子屋で使った机が残っていたという。原中寺では庫裡で勉強していたといわれる。この原中寺には明治6年二川義校分教場がおかれ、同23年まで谷川小学校がおかれていた。龍守庵は文久年間（1861～63）に創設され、同6年頃の住職は機外短道和尚と記録にある。明治5年の学制発布、6年の寺子屋廃止の通達により、寺子屋はすべて廃業している。



普門寺の寺子屋に使われていた建屋

(2) 谷川分教場の時代

義校と郷学校 明治5年（1872）7月近代学校制度についての法令（学制）が発布された。これは明治政府が教育制度の基本理念を示したものである。国民たるものはふるって学校に通い勉学し「むら邑に不学の戸なく、家に不学の人なき」を理念とした。しかし、校舎はなく教師は不足し学校を運営する費用もほとんどなかった。

そこで、学制公布後に民間有志の協力を得て設立された地域共同体の初等学校である郷学校と義校が広く普及した。郷学校も義校も来るべき小学校の準備段階として公認の学校であり、寺子屋教育から一步前進した学校であった。明治5年(1872)11月には、郷学校が廃止され1村に1つの義校が設立されていった。寺子屋時代を思うとかなり近代化された教科内容であった。そして、同6年5月以降は小学校へと改称されていく。二川地区の義校は次の2校である。

二川義校：二川、大岩、雲谷、中原、原村
 小島義校：小島、小松原、寺沢、上・下細谷村

二川義校分教場 谷川小学校の沿革史に
の設立 は明治6年(1873)9月二川義校分教場として設立とある。当時の谷川は140戸の純農村であった。同7年8月、従来の寺子屋を廃止、二川と連合して1校を発足し寛明学校ができた。同8年の同校の谷川分校は原中寺にあって、児童数は45人、(男37人、女8人・不就学児童数は男10人、女38人)であった。

同9年(1876)谷川村史によると、学校名称は第10中学第8番小学寛明学校分校で仮校舎は村の東の方にあり、教員1名・児童数40人(男34人・女6人)とある。明治7年国からの扶助金として金75円を受け取り、うち26円を中原の分校へ渡したとある。谷

第十中学区内
第八番小学寛明学校分校

川は分校であったから、扶助金も一括して本校の大岩寺に届き、そこから分校分を回したと思われる。原中寺の学校正面には校名の入った大きな表札が掲げられた。

大きさは縦5尺(1.5m)
 横1尺1寸(33cm)。

学制による学区	
第2大学区	中部8県
第10中学区	愛知県
第8番小学	(寛明学校) 大岩学校
所在地	渥美郡大岩村大岩寺
通学区	大岩村、二川村、大脇新田
(谷川分校)	雲谷村、中原村、原村
創立	明治6年(1873)10月

分校の教師は原中寺の住職が就任したと思われる。当時の教員は信望のある人を村で推薦し、世話方が実権を握っていた。子供たちは着物にへこ帯、草履を履き風呂敷包みを抱えて登校した。まだ祖父の中にはチョンマゲの人もいた頃である。決まった教科書もなく、寺子屋時代と大差はなかった。

雲谷村の子、中原村の子、原村の子、お互い親しくなったり喧嘩などもしたりした。

初期の頃は就学する子供も少なく、女子は特に少なかった。また、児童は毎日出席するとは限らなかった。就学率の低かった理由として次のことがいえる。

- ・ 親の教育観＝子供を学校へ行かすよりも家業の手伝いをさせたい
 女子に学問は不要である
- ・ 家庭の貧困＝生活が苦しく子供も労働力の一員である

学区取締や小学世話方は、不就学者の家庭を回って就学督促を図った。遊んでいる子供は急いで家の中に隠れる者もいた。

明治9年頃、二川学校と大岩学校は分離し、二川学校は妙泉寺に、大岩学校は大岩寺に移転したが、谷川学校は引き続いて原中寺にあった。この年、雲谷村、中原村、原村は合併して谷川村となる。

明治11年(1878)3月、学区改正により、第2大学区第10中学区第23番小学谷川学校と校名を変更、ここにおいて谷川学校は谷川村立の学校として県知事の許可を受けた。同12年児童の通学苦の解消のため、原村に分校を置いた(龍守庵本堂、同14年二ツ堂に移築)。この年学制は廃止され、代わって教育令が公布された。画期的といわれた学制も同5年以来、足かけ7年間で終止符が打たれた。その理由として…

- ・ 学制時代を通じて就学率が低かった
女子の就学率は極端に低い
- ・ 校舎の大部分は依然として寺院や民家の借用がほとんどだった
- ・ 教師の大部分も寺子屋の師匠であった人で、近代的教授法を身に付けていなくて従来の教授法と大差がなかった

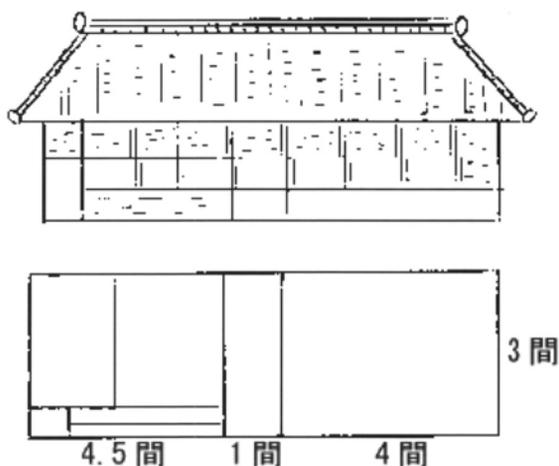
校区民は、借家住まいから独立校舎を建てる目的で、学校建設資金の頼母子講をつくり、衣食住を切り詰めて、日掛けで完納するために努力した。

(3) 谷川村立谷川尋常小学校

初めての独立校舎 明治19年(1886)

小学校令が交付され、

教科書も検定制となり、同36年には国定となる。学制以来、学校は原中寺にあった。寺院内では暗く、また生徒数が増え教室も狭くなり教育効果は上がらなかった。こうしたことから校区の人々の努力により中原の東荒神に校地を決定し、同23年(1890)待望の新校舎ができ移転した。その当時の工期、工事費などは不明である。その建物は同27年(1894)に現谷川小学校の場所へ移築され、昭和35年(1960)まで存続した。



明治23年の谷川校舎図(約92㎡)

すでに二川校は同12年に、大岩校は同15年に独立校舎に移っているのので谷川校の同23年は早い方ではなかった。新校舎の建築には国も県も援助している。同23年(1890)10月新小学校令が制定され、この月教育勅語が發布されて、国民教育の基本理念が示めされた。

教育ニ關スル勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗ノ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民
 克ク忠ニ克ク孝ニ億兆ハ一ニシテ世世厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華
 ニシテ教育ノ淵源亦ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友
 相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器
 フ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ
 義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民
 タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン
 斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今
 ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳拳服膺シテ威其德ヲ
 一ニセンコトヲ庶幾フ

御名 明治二十三年十月三十日
 御璽

愛知縣教育會昭和10年發行

教育手牒より

教育政策や教育行政も、この勅語を基本として展開され実施されることになった。本校への下賜は翌24年で新校舎へ移って2年目で、県知事から膳本が配られ細かい心得や奉読法が示された。

谷川小学校への御真影の下賜は大正8年(1933)であった。これ以後は御真影を守ることは校長の第一の責務となった。そのため校長の住宅が学校に隣接する所に設けられ、家族と共にこの住宅で生活し非常事態に素早く対応できるようにしていた。

夏目彌太郎 明治22年(1889)谷川村、
の活躍 二川村、大岩村の3村は合併し大川村となる。校名は渥美郡大川村立谷川尋常小学校で、これまでの二川小学校から独立した学校となった。しかし校長はいなく主任を置いた。

記録に残る主任は夏目彌太郎で、この頃の児童数は同25年(1892)81名、同26年90名であった。この児童数ならば教師は2～3人いたと思われる。



谷川尋常小学校校長 夏目彌太郎

彌太郎は明治元年(1868)、彌五郎の長男として雲谷村で出生した。原中寺の小学校を出て農業を手伝っていたが、学問で身を立てる決心をたて、当時この地方では最高の学校である細谷小学校高等科3級を卒業したのが18歳の時である。20歳の時、渥美郡堀切小学校の授業生心得となる。(月給2円50銭、当時米1俵2円ぐらい)当時の教員の区別は一等訓導、権訓導、授業生、授業生補(心得?)となっていたようだ。

21歳で上京(まだ豊橋駅はなかった)、苦学して教員養成所を卒業した。23歳の時、東京の錦華小学校訓導となったが、25歳の時、郷里の人々に懇願され谷川尋常小学校に奉職する。赴任した時は、初期校舎のできた直後であった。同33年8月、改正小学校令が公布された。これは日清戦争後の国民の自覚向上、日本の産業革命、富国強兵策の推進、就学率の向上などが背景となっていた。

本校には創立から明治32年までは校長は置けなかった。これは当校に限らず、この程度の学校はどこも同様であった。学制の頃の教員は身分が低く、村の雇い人であった。これが次第に任免権が県へ移っていった。その頃の学校管理の実権は戸長や世話方にあった。やがて校長が置かれるようになり、管理の責任者となっていく。

谷川尋常小学校の初代校長は、これまで主任であった夏目彌太郎である。彼は同25年(1892)以来勤務していたが、長期講習生として名古屋の師範学校に学んだ。それは当時の教員免許状が府県ごとであり、東京の教員免許状が愛知県では適用されなかったためであるという。明治31年3月首席で卒業し、校長の辞令を受けたのは同33年9月で33歳秋のことであった。

彼は教育を至上の使命として日曜日でも弁当持参で登校し、夜は青年の教育にもあたった。教授法は最新式の討議法を加味した。私宅においては、雲谷地区の青年有志数人で夜学会を開いて学力の補充、風俗の矯正、農蚕業の改良など勤勉、勤労の貴さについて共に考え学んだ。その頃は校区内で新聞を読む家庭はごく少なかった。そこで校区内に新聞閲覧所を設けて新しい知識の導入をもはかった。

春夏に敬老会を催して村や校区に尽くしてくれた先輩の老人たちに感謝する気風をも大切にした。田畑の作物の改良、植林、講演など目覚しいものがあった。

彌太郎の性格は厳格で短気であったが、礼儀正しく目下のものを呼ぶにも「〇〇さん」と呼び、教え子が訪れると大喜びで食事を共にして語り合うこともしばしばあった。植物採集も楽しみのひとつで、草花や道端の雑草を見るにも気を配って見ていた。

**二川町立東部 明治39年(1906)7月
尋常小学校** 谷川村・大川町・細谷村・小沢村は合併して二川町となった。同40年2月28日谷川村立尋常小学校は自然廃校、翌3月1日から、二川町立東部尋常小学校となる。校長は引き続き夏目彌太郎であった。教科には明治39年唱歌、同40年に裁縫が加わった。この東部という校名は昭和30年3月1日、豊橋市へ大合併するまで50年間続く懐かしい名称となる。

明治40年小学校令が改正され、義務教育は6年に延長された。日露戦争の直後で軍備拡張が国内に溢れていて学校教育も軍事的色彩が強められていった。歩兵18連隊練兵場れんべいじょうで小学校の連合運動会を開いたり、戦捷祝賀会せんしょうに参列したり、校庭に日露戦争記念樹を植えたのもこの年であった。



現谷川小学校正門内の戦捷記念樹

夏目彌太郎は校長として引き続き大正5年(1916)3月まで勤務、通算25年となる。大正の教育は明治の画一主義に対し、個別主義、分団学習という新しい考え方が主流であった。作文教育も児童中心に読み書きをさせるようになった。

この時代の本校の主な出来事は、次のようなことである。大正3年に校庭上空を初めて飛行機が飛んだ。これは陸軍機で所沢発、大阪方面行きの2機であった。児童も教師も手を振り、躍り上がって万歳を絶叫した。同7年、高等科が置かれ、校名は渥美郡二川町立東部尋常高等小学校となった。尋常科は3学級で複式授業だった。即ち1,2年で1学級、3,4年で1学級、5,6年で1学級だった。高等科も1学級で合計4学級となった。別に実業補修学校も併設され、専任の教師も置かれた。開校式は10月で、学習期間は男子は夜間が中心で就学年限は5～8年だった。同8年、本校にも御真影下賜、校長は郡長とともに県庁にて受領し、汽車で二川駅へ、さらに人力車で谷川校区へ向かった。奉迎のため児童は立岩稲荷前に整列、御真影を警護して学校へ安着、裏校舎の奉安室へ安置された。この日、見渡すかぎり黄金の稲穂が重くたれていた。翌日、御真影拝賀式が行われた。



二川東部尋常小学校奉安庫

大正13年(1924)、北校舎の一部を改造して家庭科室にあてた。この頃まで夜の照明はローソクやランプが主に使用されていたが、道端に電柱が建てられ電線が張られ家庭に電灯が普及し、初めて夜もこの明かりで勉強できるようになった。5月27日、海軍記念日に春の運動会が催されるようになった。

同15年(1926)12月、全国民が天皇陛下のご病氣平癒の祈願をしたが、12月25日崩御されて大正時代の幕を閉じた。

(4) 二川東部国民学校の時代

昭和初期の谷川 昭和初年は世界的な経済恐慌が襲ってきた。

銀行の取引停止で谷川の人びとも大きな打撃を受けた。この地方の農家の主要な収入源である繭価も1貫(3.75kg)1円代にまで下がった。(以前は5円ほど)工場の人員整理、ルンペン(ドイツ語で「ボロ」の意、ホームレス)の増加は学校にまでも一夜の宿を求めてやってきた。社会不安は増加し大陸での開拓事業、農村の自立更生が叫ばれた。

学校教育もこれまでの自由主義教育は反省され、代わって郷土教育や労作教育などが新たに登場した。歴史教育では皇国史観の教育となり神話の重視、忠臣の登場となった。修身科の忠孝思想とともに国体の尊厳、愛国心などが強調された。

昭和3年(1928)初代校長夏目彌太郎氏が永眠され、校区民、卒業生は別れを惜しんだ。この年、御真影を安置する奉安庫が11月に完成した。以後は三大節(紀元節、天長節、明治節)には御真影を掲げ、教育勅語奉読、学校長の訓話が毎年行われた。



二宮金次郎の石像(昭和7年建立)

昭和6年(1932)の満州事変から同12年(1937)日華事変へと戦時色が濃くなった。この思想は学校教育にも影響して、質実剛健、義勇奉公、軍人崇拜、戦地を思えの教育が随所に滲みでた。

国民精神総動員 昭和12年9月の統制経済、国民精神総動員運動

によって戦時体制はますます固められ、「興亜奉公日」「八紘一宇」「拳国一致」「堅忍持久」「欲しがりません勝までは」「贅沢は敵だ」といったスローガンが随所に見られた。日中戦争の拡大とともに戦時色が濃くなり、戦時体制の根幹がつけられた。物資動員計画は軍需、官需を最優先とし、民需は必要最低限に切り詰められた。

谷川の教育も、勤労報国、資源愛護が強調された国の方針に沿って展開されていった。

健康優良児の思い出

昭和の初期、富国強兵の教育方針に基づいて青少年の体育向上に、国は大いに力を入れた時代でした。小学生の健康優良児表彰が行われたのも、その方策の一つと思われます。私は幸いにして大きくて健康でしたので渥美郡1位に選ばれました。当時体力テスト並みの検査があったことを覚えています。私の2歳年上の姉ち糸子は愛知県1位の健康優良児でした。私の時からこの表彰制度も各郡市単位に移り、県としての表彰はなくなりました。



昭和16年卒業生 石田俊一郎

二川町立東部 昭和16年4月から長
国民学校

年親しまれてきた小学校の名を捨て国民学校と変わった。国民学校は皇国民を練成する道場と化した。その年12月8日太平洋戦争が勃発した。

戦時中は体操も軍隊式となり剣道や薙刀なぎなたが取り入れられ、学芸会にも時局が反映した。緊迫した戦局、空襲の被害を軽減するため、小学校3年から6年までの学童を疎開そかいさせるようになった。10歳になるかならない児童が涙をこらえて親元を離れ生活をするのである。谷川地区では親戚を頼ってきた疎開者が殆どで、終戦当時には児童数298人と最多であった。

転出入内訳

昭和	転入	転出	主な転入先	
18	3	1	市内	26
19	17	6	静岡県	16
20	58	28	名古屋	16
21	10	11	東京	8
22	1	4	朝鮮	4
23	1	5	埼玉	4
24	1	0	大阪	2
計	91	55		

国民学校最後の卒業生

国民学校卒業は敗戦色の濃くなった昭和20年3月であった。高等科時代は勉強するにも教室には軍隊が駐屯ちゆうとんしているので場所もなく、毎日食糧の増産作業や出征家庭への援農作業にあけてくれた。同級生の中には女子挺身隊として軍需工場で空襲の犠牲になった人もいた。

27人の卒業生は、進学する者、食糧増産に励む者、軍需工場で働く者など、戦況に脅えながらの卒業だった。

昭和20年3月卒業生 朝倉佐一

サイパン島陥落（昭和19年）以来空襲も激しくなり、学校にも軍隊が駐屯し教室を提供した。この他神社、寺、公民館も宿営場所になった。校庭は空襲を避けるため、たこつぼや防空壕が掘られて混乱していた。学校では爆風からガラスを守るため、紙を貼ったり、焼夷弾しょういだんが天井に落ちた場合素早く取り出すために穴をあけたりした。防空避難訓練も繰り返され、重要書類はいつでも搬出できるように用意された。夜中でも空襲警報が発令されると職員は駆けつけて警備についた。児童は食糧増産のために学校農場や出征家庭の手伝いに動員された。

農繁休暇

戦時中は学童も銃後^{もつば}にあって専ら、食糧増産のために出来る限りの手伝いをした。春と秋の農繁期に農繁休暇があった。麦刈り、芋挿し^{いもさし}、田植えなど春の多忙時に各々自宅もしくは出征家庭への援農作業、女子においては幼い子供の守り、家事の手伝いをしてきた。また農繁期には託児所なども設けられ、共同炊事も行われ非農家の女性も手伝った。

秋の取り入れの頃には、稲束を結束する「すがい」をなうために、学校の校庭で高学年の児童は藁^{わら}で手を擦り減らして作る情景がみられた。でき上がったものは人手の足りない農家や出征留守の家庭に配られて食糧増産の陰の力となって頑張ってきた。

(5) 戦後の民主教育

終戦直後 昭和20年(1945)8月15日

この日も非常に暑かった。昼食に我が家に帰った住民は、意外な玉音放送^{ぎょくおん}に耳を疑った。その頃のラジオは古く、雑音も多くて、はっきり聞き取れなかった。聞いた人達の受け取り方もまちまちで「日本が負けただ」「いや勝っただ」といい張っていた。しかし、時間が経つにつれて真相もわかってきた。

9月の新学期からの教育に教師たちは目標を失っていた。連合軍からの指令で教科書の一部または全頁を削除するよう通達があり、いわゆる黒塗り教科書の使用が始まった。食糧事情は最悪で児童も午後は防空壕の穴埋めや、秋の蒔き付けにと食糧増産のために少しの土地でも耕して作付けをした。

昭和21年正月、人間天皇の宣言があった。昭和3年以来の奉安庫も姿を消した。宮城^{きやうじやう}遙拝^{ようはい}、天皇陛下万歳は取りやめ、体操も軍国

調を一掃した。「集まれ」「右へならえ」の号令も禁止された。石炭、電力の不足、ローソク暮らしの夜が多く、勉強に励む子はほとんどいなかった。谷川は高等科がなくなり6学級となる。同23年にはPTAが発足して初代会長に河合隆次が就任した。

二川中学の創設

愛知県の六三制の基本方針に沿って、谷川、二川、大岩の代表が会合を重ねて、ともかく谷川校区と二川校区で1中学を設立することに決定した。昭和22年(1947)4月18日より県下一斉の開校に揃えて、渥美郡二川町立二川中学校として創設された。当時は中学校とは名ばかりで、二川小学校の教室を午後借りたお粗末な授業だった。職員室は二川町役場の2階が当てられ、職員の出勤も午前11時頃という中途半端なものであった。教員も国民学校からの異動が大半で、新規採用が2割、青年学校より2割、旧制中学からも集められた。教科書もなく先生たちは教材作りにあれこれ研究して授業をおこなった。

学校建設には校区民も道具・弁当持参で勤労奉仕で協力し、生徒も軽作業の手伝いのため動員された。建設への意欲と情熱はすこぶる高く、来るべき自分たちの学び舎を作るために不平も言わずに頑張った。

「六三制 野球ばかりが 強くなり」などといわれた。



建設当時の木造校舎

二川中学第1期生の思い出

昭和22年二川中学校が創立された。小学校の間借り授業からの開放を願って生徒達も校舎新設のために作業を真剣に手伝った。教科内容に社会科、家庭科などが加わった。この頃は食料不足で、家庭では育ち盛りの子供の食べる物の確保にいろいろと苦労された。



第1回(昭和23年3月)卒業生 夏目 桂

当時は便所の汲み取りも肥料不足のおりで大切な資源として入札が行われ年間1,610円で落札、現在では考えられないことである。児童の中にはシラミがいる者もいたのでDDT粉剤によるシラミ駆除も行われた。この頃、校歌の募集が行われ数多くの応募があったが、本校佐原深末教諭の作品が選ばれ、学芸会の席上で発表が行われた。

昭和30年3月、近隣の町村は豊橋市に合併して、校名も豊橋市立谷川小学校となった。校区内の有志によって各種の遊具の寄付などがあり次第に充実した。

卒業生などから天文台、プラネタリウム、グランドピアノ、ミュージックチャイム、その外の寄贈があった。

昭和三十年からの校章



同44年には運動場の拡張や、待望のプールが校区民や校区内企業の尊い寄付協力によって完成した。

谷川小学校は「人間性豊かな谷川の子」を教育目標として心と体を鍛えて、自分で考えて勉強し、自然を愛し、自然から学ぶ子に育てていくように努めている。本校の特色として、地域の特性を生かした環境教育は市内外で高く評価されている。また伝統ある民芸教室では、自然の素材を利用して遊ぶ道具作り、昔の遊びなど豊かな体験をするため、校区の人々から熱心な指導を受けている。

東部小学校から 「個人を尊重し、真理
谷川小学校へ と平和を希求する」新

教育が始まった。社会科が発足しローマ字学習が盛んとなり、男子の家庭科も始まった。昭和24年(1949)運動場を878坪(2,897m²)拡張し、校門も移転した。文部省の勧めで二川町よりの助成金5万円で学校林が雲谷町地内に開設された。面積1町4反3畝(14,300m²)



学校林を示す石柱

で、同25年3月植林(松苗3,560本、桧苗670本)し、以後補植間伐をPTA活動として実施した。

二川中学校の 昭和23年9月に待望の

発展と充実 新校舎ができあがった。運動場も整備されて運動部の活動も活発になり、テニス、野球、バレーボールなど盛んで選手育成に情熱が注がれ高校、実業団の名選手も育てられた。本校の校舎も昭和43年(1963)

頃より順次取り壊されて、鉄筋2階建の校舎や体育館もできあがり、生徒達が意欲的に勉強できる環境が整ってきた。

平成13年から3年間、市教育委員会から「生徒指導」、同時に文部科学省から「地域ぐるみの学校安全教育モデル推進事業」の研究委託を受けた。この研究で多大な成果をあげ、県内外から格別な評価を受けた。また平成16年には、健全育成会の活動に対して、愛知県知事及び豊橋市長から表彰を受けた。

谷川音頭 谷川校区には昭和の初期から唄い継がれている谷川音頭と梅鉢行進曲がある。作詞者作曲者は不明だが谷川校区3町の特色をよく表して軽快なリズムで表現され、校区民にもよく馴染まれいろいろな行事にとりいれられている。小学校の運動会には児童を始め来賓、職員、PTAなどで楽しく踊る。

1. 雲谷普門寺 ハヨイヨイヨイ
名だたる勝地 サットオイデ
歴史訪う人 国宝見いやれ
山は紅葉の錦に着替え ヨイジャナイカ
姿写した鏡岩 ソレヨイヨイ
谷川よいむらよ
2. 春は桜の ハヨイヨイヨイ
立岩稲荷 サットオイデ
色もほんのり かすみの中に
赤い鳥居にえにしをまかせヨイジャナイカ
岩を屏風に立てて咲く ソレヨイヨイ
谷川よいむらよ
3. 守りたまえと ハヨイヨイヨイ
原神様へ サットオイデ
固く誓った 大願成就
家内揃って 踏む石段は ヨイジャナイカ
嬉し百度の 礼参り ソレヨイヨイ
谷川よいむらよ
4. 省略

谷川保育園新設 この地域にも企業の進出が始まって農耕地が順次工業用地として提供され、農業離れが進み女性の職場進出も増え、そのため保育施設の要望が強くなった。当時の校区役職者などが関係方面に働きかけて、昭和49年(1974)より開園の運びとなった。



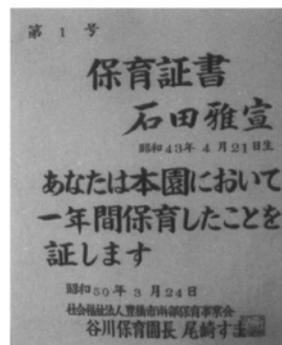
開園当時の園舎

子供は家庭で愛情に満ちた両親に育てられるのが理想である。しかし、保育園は両親に代わって家庭的な場を提供し、養護と教育とを一体として、豊かな人間性を育むことを目的とした児童福祉施設である。当園は自然環境に恵まれ、校区民の理解と協力のもと職員の熱意によりさらに充実発展している。

平成10年鉄筋コンクリート2階建の園舎に変わり敷地も拡張され園児が自由に遊べる環境が整った。定員は現在100名である。

保育証書第1号

中原町に保育園ができました。校区の多くの人達が望んでいた保育園の開園です。第1期園児として入園したわが子を早朝



より自転車に乗せて通園したものです。遊具も少なくして新設する度に、我先にと初乗りを競ったものです。

石田雅宣さんの保護者 石田 栄

2 社会教育

(1) 子供は校区の宝

通学団 戦前、谷川校区の通学団は、雲谷、中原、原、豊清（比舎古）と4地区にあった。団長を中心とした上級生のきびしい指導のもと、強い団結力をもっていた。各種の活動も、上級生の指示に従って下級生は必死にがんばったものである。そして集団のルールを学んだと思う。不思議なことに、親や先生は一切口出しをしなかった。戦後は、この通学団も民主的な集団になり、上級生は下級生の世話をしたり、やさしく教えたりしている。以前から、運動会では通学団リレーが最後の種目となった。各通学団は学校が終わってから、お宮に選手を集めてバトンリレーを密かに練習をしたものである。現在は、通学団を中心にして、防犯や交通安全、挨拶運動などの推進に校区をあげて努力している。

子供会の活動 戦後しばらくして学校教育とは別途に、各地域において子供達の自主活動のもとに、児童の健全な成長を育もうと、昭和26年（1951）から子供会が結成された。各町の運営の方法は異なっていたが、地域にあった方式でスタートした。各運営は青年会がおこない、学習のほか、春は遠足、夏は盆踊り秋には町内運動会など学校の行事と異なったかたちで楽しんできた。昭和30年（1955）当時子供会の活動も活発で、NHKが取材に来た。各町で青年会の組織がなくなり、以後はPTAが運営するようになった。



子供会植樹の桜道通学

中原町では、子供会の卒業記念として、昭和30年から西池の周辺道路に桜の苗を植えてきた。初年に植樹したものは50年を経て、春の入学式の頃には満開のトンネルを通して新入生たちも楽しく通学している。

民芸教室 民芸教室は昭和57年（1982）から実施している伝統行事で、平成18年で25回目を数える。

この教室の目的は

- ① 地域の人達との交流活動を通じ、相互理解を深め思いやりの心を育てること
- ② 地域の材料を利用した創作活動を通じて地域理解を深め、伝統的な遊び道具を手作りする良さや楽しさを味わうこと

主催は校区社会教育委員会と谷川小学校であるが、毎年開催時には地域の有志の方々やPTA関係、ボランティア等100名ほどの参加者がある。低学年は缶ポックリ・めんこ・おはじき・お手玉・綾取り^{あやとり}等で遊び、3～6年生は^{たこ}罎・竹とんぼ・紙鉄砲・竹馬・リリアン・お手玉・編み物などを製作し、この遊具を使って楽しんでいる。最後には地域参加者と児童と一緒に、5年生が育てたお米で手作りの五平餅を食べながら交流を深めている。



民芸教室 罎製作中

このような活動は子供達の心に残る思い出となっている。

雲谷子供神楽 伝統を継承してきた神楽だが、後継者難の状況が続き、途絶えてしまう危機感があった。こうした時、谷川小学校へ赴任された小林幸恵教頭は、苦勞を惜しまず私的な時間を割いて、保

存会の奏でる笛と、太鼓のお囃子をもとに楽譜を作成した。譜面があれば小学生でも演奏できる。3年生以上の児童を募って、小林先生や保存会の皆さんが演奏や振り付け指導を続けた。子供達の努力が実り、折に触れその練習の成果を発表してきた。この事情を耳にした二川町の山本修司氏は、子供用獅子頭を匠の技で彫刻し、寄進してくださった。多くの支援と努力によって、平成16年鹿嶋神社秋の大祭の折、宮司のお祓いを受けた後、神前で奉納神楽を見事に舞い集まった人々から喝采を受けた。今後も子供達が伝統を継承し一層努力することを期待する。

(2) 校区の活力

自然に学び 平成13年10月25日谷川

自然を守る 小学校にホタル園ビオトープが完成し、幼虫50匹を放流した。翌14年6月20日谷川ホタル保存会が発足した。これはホタル園ビオトープの活動を支援しホタルの生息する校区の自然を守っていくことが目的である。年2回の定期総会を持ち、ホタル講師による研究会や小学生によるホタル園活動の現況報告、また会員による今後の活動方針が議題となる。

会員は校区総代会、PTAの各役員、学校教職員及び有志で構成されている。活動を振り返ってみると、ホタルの餌となるカワニナの飼育、ビオトープの管理、また会員による半尻川なかぼらと中原川のパトロール、環境向上の看板立て等が行われている。今後も全校児童がホタルに興味と関心を持ち、自然と共生できる心を育てるよう、校区の大人たちも頑張っている。



半尻川に立てた看板

大石社俳句会 明治20年(1887)に大石社俳句会が発足した。

「大石」とは中原町の雄大な立岩のように「社」とは氏神の加護により平和で安全にとの願いで命名された。農村生活は大自然に逆らうことなく素直に自然を愛でる心を養い、仲間同士が同じ目線でものを観ることができる目を培ったのである。この会は明治、大正、昭和、平成と四世代経て115年の長期にわたって続けられている。現在は会員15名で毎月の例会、吟行、文化祭、追悼句会、投句等で活躍し地域文化の発展に寄与している。

句集「あしあと」故尾崎花蝶(与一)
地域の生活色が滲み出ている充実した生活に
努めようとした気持ちが表現されている。
昭和2年18歳の若さで入会し、以来60余年
本会と共に歩まれた。
巨星墜つ なお惜しまれつ 春を逝く
心まだ 燃ゆるものあり 曼珠紗華
この2句は友人への追悼句と辞世の句である。

公民館活動 公民館は以前より校区3町にあったが、平成15年に雲谷公民館が新築され充実したものとなった。集会場、舞台等があり敬老会、文化祭、芸能大会など行事も多彩である。中原町では昭和51年より続いている舞踊クラブの練習が毎週行われている。

体育活動 校区では、ソフトボール大会、ソフトバレー大会、中原町の運動会など、その機会が校区民の親睦の場となっている。ソフトバレーは、平成元年頃よりチーム作りが始まり、現在校区で2チーム37名が頑張っている。

3 史跡・文化財

(1) 谷川の史跡

普門寺（雲谷町） せんぎょうさん 船形山普門寺は真言宗の寺院である。その歴史は古く創建は遠く奈良時代までさかのぼる。裏山は30町歩（30ha）あり、その中腹に本堂の観音堂が建っている。この本堂の東側の山には往時の寺院跡が数多くあり、8合目位の所に元堂跡がある。今も柱石や五輪の塔が並んで建っている。ここには昔、日照りが続き干ばつの際、雨乞いの祈願を行った池がある。そこから10分ほど山を登ると船形山の城跡があり、石垣や空堀も一部見受けられる。（現在は中部電力の鉄塔が建っている）城跡から山道を15分位行くと元々堂の跡があり、ここにも柱石などが残っている。上ノ山国有林内にも寺跡が多数見受けられる。これらのことから船形山の一带には数多くの寺院があったことを物語っている。



船形山全景

御霊様（原町） みたま 西南戦争は明治10年（1877）2月、西郷隆盛軍が新政府に反対して戦った戦争である。佐原家の「寛様」は、この戦争に政府の徴兵で軍人として出兵し、同年7月31日宮崎県下で戦死した。その後31年に御霊様（正三位勲一等）として、石碑を建立した。当時は富国強兵軍事拡大の時世で、村を挙げて祀りが行われた。石碑には三河や遠州各地の町や村や人の名前が刻まれている。特に太平洋戦争中には大勢の参拝者が訪れた。



御霊様



才の神

才の神（雲谷町） 賽の神とも書き馬込の峠に祭られている。境界を司る道祖神で石神様ともいった。外部から地域に侵入する外敵や病気などの災いを防ぐとされている。また地方によっては縁結びの神ともいわれている。過去に、ここ才の神付近一帯で数度の山火事があったが、奇しくもこの森だけは火災に遭わず巨木が残っている。

校区内の ① 鹿嶋神社（雲谷町）創

神社仏閣 建は普門寺と同じく聖武天皇の御代、神亀年間（724～728）と伝えられる。往時は現在地よりも山奥に鎮座していた。最古の棟札は応永33年（1427）が残っている。領主伊奈備前守の崇敬篤く雲谷村神明黒印3石6斗とある。明治44年（1911）字ナベ山下に鎮座の八幡社を合祀。大正13年（1924）指定村社となる。祭神が刀剣の神、戦の神であることから戦時下には参拝者も多く、拝殿には明治時代の陸軍第3師団分列式の奉納額や絵馬などが奉掲されている。

② 神明社（中原町）

神社の創建年代は不詳であるが、領主伊奈備前守の崇敬篤く、神明八幡天王除地5石6斗5合とある。明治42年（1909）の許可により、八幡社、竈神社、天満社の3社を合祀した。

③ 立岩社（中原町）

今から1105年前、宇多天皇ならびに醍醐天皇に仕えた菅原道真は、左大臣藤原時平の中傷で九州の大宰府へ(901)流刑され、2年後榎寺で没した。道真の怨霊が白狐を使者として各地に遣わした。郷土の「庄左衛門」の枕元へもこの白狐が夢の中に現れ、庄左衛門は立岩の麓へ祠を建て祀り、天満宮の源としたと伝えられている。江戸時代には参勤交代の大名が当地へ迂回して参拝したようである。

④ 立岩稲荷（中原町）

詳細は不詳。御神体は伏見稲荷大社からの分祀といわれ、宮型の御神座に安置されている。なお立岩社とは、ここでいう天満社と稲荷社の総括呼称である。

⑤ 神明社（原町）

成務天皇30年(160)に創建されたと伝えられる。記文によると原郷の始まりは、12代景行天皇の御代といわれ景行天皇には双子があり第1子が成務天皇で、第2子が日本武尊である。棟札は寛永6年巳9月吉日(1629)が残っている。腹部の病に霊験ありと戦時中は千人針の祈願で賑わい、今でも多くの参拝者が近郊よりある。大正13年(1924)村社に指定された。

⑥ 立岩山原中寺（中原町）

龍拈寺の末派で龍拈寺11世峯室山巖雄大和尚によって寛永5年(1628)に創建され、本尊は釈迦牟尼仏の立像である。文久年間(1861)に寺子屋が創設され、原中寺の僧が教師となり常時子弟が学んでいた。明治5年(1872)寺子屋廃止後は中原学校の教場となった。

⑦ 源洞山龍守院（原町）

源洞山龍守禅庵の開基は天文12年(1545)とされ、白須賀藏法寺の末寺である。十一面観音菩薩を本尊とし、また境内には願王地藏を祀る。近年地域の産業化で人口が増え檀家数が増加している。

(2) 谷川の文化財

普門寺の重要文化財 石門に続いて仁王門が参道の正面に鐘楼門が見える。この門の奥の客殿には不動明王立像が安置されている。鐘楼門から左手を登ると本堂(観音堂)、大師堂、弁天社がある。本堂前には市指定天然記念物の大杉がある。一方、仁王門を過ぎた左手の奥には、耐火構造の収蔵庫がある。庫内には経筒他、仏像などの多くの重要文化財が収蔵してある。

雲谷の神楽 雲谷町では神楽を無形文化財保護のため保存会を結成した。氏神様の祭礼には神前にて舞が奉納される。昔の雲谷神楽は、東三河や遠州方面の各戸を廻った「厄払い」が中心であったが、今は「悪魔祓い」「五穀豊穡」「郷中安全」を主とした舞である。普門寺の春祭りや二川本陣祭りにも神楽保存会の人々によって奉納している。また3年前より町内の小学生達が、雲谷神楽の伝統継承のため練習に励んでいる。



雲谷神楽

4 風習と民話

(1) 生活に生きる行事

講の各種 校区には有志による古くからの慣習行事がある。

① 大峯山講 雲谷町、原町には山岳信仰の行事が残っている。大峯山は世界遺産にも登録された奈良県南部山地にある。標高約

1900mの嶺峰が聳え立つ山に、古くから修験者の道場が役の行者により開かれ、多くの人々の信仰登山が行われている。女人禁制を保つ最後の山でもある。原町では毎年、雲谷町では2～3年に1回、7月下旬頃参拝登山をしている。参加者も古希から喜寿を過ぎた人達も多く、本堂まで往復5～6時間の登山での修行は大変厳しく疲労困憊するが、下山後の洞川温泉での懇親会で翌日からの英気が養われるようである。また雲谷町では、町内の「行者山」の山頂に祀られている、役の行者の石像に毎年正月に参詣している。



信仰の山 大峯山

② 庚申講 庚申の年は60年に一度、庚申の日は60日ごとに巡ってくる。仏教では青面金剛を、神教では猿太彦を祀る。中国の道教に由来し、天智天皇の時、始めて儀式が行われたという。人の体内の頭部・腹部・脚部には三尸という虫がいて人を早死させようと、庚申の夜に帝釈天に告げて死に至らしめるといふ。人々は庚申の夜には寝ずに青面金剛を祀り経を唱え三尸という虫を鎮めようとした。平安時代から宮廷貴族、戦国時代には武家の間で広く信仰され、一般民衆に普及したのは室町時代からで、江戸時代に至って隆盛を極めた。

次第に仏教的な色彩が濃厚となり、五穀豊穰、子孫長久、商売繁盛、厄病、火難水難、盗難除けの御利益があると信じられてきた。人々の結社・集会が禁じられていた統制の時代、



青面金剛石仏

「信仰での集い」を名目に、地域内の重要な相談もこの場で行ったようである。

今の校区内では簡略した祀りとなり、また価値観の多様な時代で脱会者も多い。人々の多幸を祈りつつ、扶助と連帯を願う素朴な心情が、講の起源と根幹であったことを思えば、途絶えてしまうのは寂しい思いがする。

③ 秋葉山講 火伏せの神として各町内神社の境内には、秋葉神社の末社があり、祭礼の日には幟を建て祀っている。中原町神明社には文政元寅年(1818)建立の常夜灯がある。校区内の人々の信仰は篤く、本宮へは代参にて、毎年各町内欠かさず参詣している。

盆・正月の行事 校区内各町の盆の行事

はほぼ同じであるが、とりわけ雲谷町では、新盆を迎えた家々で伝統的な宗教行事の送り火が行われている。「上の池」の堤防で塔婆に花を供え百八の松明を燃やし、僧侶の読経の中親類縁者はもとより、町民こぞって参拝する精霊送りの行事である。この火は新幹線の車窓からも遠望できる。

正月の行事として、普門寺では毎年除夜の鐘撞が行われる。檀家以外の参拝者も多く大変賑わっている。普門寺の梵鐘は戦時中軍隊の弾丸に供出されたが、10数年前一檀家の奇蹟的な寄進により復活した。

また中原町では立岩山の頂上で、元旦のご来光を大勢の人々が厳かに遥拝し、「おとそ」で乾杯し新年を新たな気持ちで迎える儀式が行われている。

新しい行事 原町では平成8年から神明

社秋の例大祭の催しで、打ち上げ花火、手筒花火が祭礼青年により奉納されている。平成2年祭礼青年発足当時からカラオケを行っていたが、より神社を賑やかで明るい祭りにしようと始めた行事である。手

筒煙火の作り方は、花田一番町や大脇町から手ほどきを受けた。

慶事で奉納する希望者も増え、今では手筒・打ち上げ花火の両方が、出産・新築・結婚・入学など多種多様の慶事で奉納されるようになり、神社の祭りの夜は大変明るく大いに賑わっている。



夜空の饗宴

普門寺では平成12年から、毎年10月10日の夜、^{まんどうえ}万燈会が行われるようになった。信者がそれぞれに無病息災、家内安全、交通安全など種々の祈願をあらかじめ申し出ておく。当日は、^{ほや}火屋に祈願が書かれた多数の^{ろうそく}蠟燭が、参道や境内に整然と並べられ、日暮れとともに一齐に点火され、本堂内での僧侶読経の中、^{くらやみ}暗闇に^{とも}灯る^{しよっこう}燭光の幻想的で霊験あらたかな境内に、多くの人々が参拝に訪れている。

(2) 民話

立岩の白狐 菅原道真の^{おんりょう}怨霊の^{つか}遣いと
して白狐は立岩社設立の由来にあるが、狐は一般的に稲荷神社の遣いともいわれている。当地では立岩の稲荷さんに



立岩稲荷神狐

「油揚げ」を供えようと願い事が叶うとのいい伝えがあった。信者が参拝の時供えた油揚げは、もう翌朝に

は必ず無くなっていた。

当地の立岩稲荷には白狐が実在し、岩穴を根城に住んでいたようだ。前述の立岩天満宮の夢の白狐と、立岩の稲荷神社の白狐との因果関係はわからない。

普門寺の鏡岩 船形山普門寺の北西の裏山に、鏡岩という大きな岩

がある。この岩は太陽の光を反射して光り輝いていた。^{ようこう}妖光が遠州灘を照らすため魚が逃げてしまい、漁業が成り立たなくなった。怒



鏡岩

った漁師が海水をかけて輝きを曇らせ、そして岩を裏向きに変えてしまったという。

^{わん}椀かせ岩 地元の人達で「芋煮会」をしていたら、煮物を求める声が立

岩の方から聞こえてきた。「椀の数が足りない」と答えると、「椀を持ちに来い」との返事が返ってきた。声のする方に行くと、大きな岩の上に立派な椀があった。早速その椀に芋煮を入れて岩に供えた。

その後、椀が足りない時岩に祈ると、翌朝には足りない数だけの椀が岩の上に置いてあった。椀かせ岩は、喫茶「立岩」前のバイパス道路沿いに現存している。



椀かせ岩

編集後記

豊橋市が市制を施行してから、すでに100年の歳月が流れた。ひとくちに「100年」といっても時の流れはめまぐるしく、その中には市民ひとりひとりの苦楽が凝集され、幾多の思い出が積み重なっている。

同様に、谷川校区民も、どんな時代にも懸命にたくましく生きてきた。そして、その根底にはふるさとを愛する熱い思いがあふれていると確信する。

編集委員は、歴史についての知識はほとんどなかったし、ましてや本の編集の経験もなかった。しかし、「素人」という立場から努力を重ね、心を込めて記述をすれば、校区の方々も本書を読んで、校区の歴史を理解してもらえるのではないかと考えた。そして、この編集活動を通して、委員全体が成長していこうと誓った。

編集にあたって確認したことは次のことであった。

- (1) 1年半の編集計画を明確にし、どんなことがあってもそれを確実に守ること
- (2) 十分な時間をかけて、詳細、綿密なプロットを作成すること
- (3) 資料や写真などの収集に努力すること
- (4) 原稿は全員で書き、原稿審議はきびしくすること

特に、プロット作成については、異常なまでに力をいれた。プロットが完成した段階で原稿書きに自信を持つことができた。

編集を進めるにあたって、第1章、第2章、第3章のそれぞれ担当者(4~5名)を決め、月に2~4回の部会をもった。そして、毎月1回を原則として全体会を行った。17年12月の原稿審議は、全体会を3回行い3日とも午前0時を過ぎるほどの熱の入れよう、委員の意識の高さを強く感じた。

地域の変容は、時代の要請であるが、その地域の発展と福祉に結びつくものでありたい。だが、その変容が急激な場合には、変容が先行してその土地に生きた人々が、時の流れの中ではぐくみ育ててきた歴史や文化をも変化の渦に巻き込み、押し流してしまうこともある。

本書は、谷川校区の歴史であると同時に、この地の歴史をひもとく鍵となり、地域理解の一端に寄与し、その連帯に貢献することができるなら望外の喜びとするところである。

あれから1年半が経過し、編集委員の努力によって今一冊の本が完成した。しかし、これはもちろん完全なものではなく、調査不足や紙面の関係で記載されていないことも多くあると思っている。今後さらに充実した校区史が誕生することを切に望みたい。

なお、資料や写真の収集にあたって各方面からご協力いただいたことに対し、紙面をかりて厚くお礼を申し上げる。

平成18年 春 編集委員一同

編集委員

校区総代会長

川合利廣	平成16年度
佐原重弘	平成17年度
夏目定寛	平成18年度

第1章(自然と環境)

尾崎収男	夏目宏己
佐原康夫	戸田修弘

第2章(歴史と生活)

加藤忠幸	山田 稔
石田善孝	山田克也

第3章(教育と文化)

朝倉佐一	夏目 桂
夏目近尉	石田 栄
箭野忠雄	

谷川校区歴史小年表

西暦	年号	日本・豊橋周辺のできごと	谷川校区とその周辺のできごと	
	古墳時代		谷川古墳群 一里山で窯業始まる 東細谷で須恵器造る この頃三河の国となる	
701	大宝元年	大宝律令制定	普門寺開山	
727	神亀4年		東観音寺開創	
733	天平5年		船形山焼失（台蜜・東蜜の勢力争い）	
1170	嘉応2年		化積上人による普門寺復興	
1181	養和年間		船形山焼失（今川・織田両勢力の船形山合戦）	
1533	天文2年		源洞山竜守院開基	
1545	天文12年		今川義元による普門寺再興	
1548	天文17年			
1604	慶長9年		二川村、大岩村の検地	
1621	元和7年			中原新田開発
1628	寛永5年			立岩山原中寺創建
1657	明暦3年		助郷制度誕生	谷川3村が白須賀宿の助郷村となる
1869	明治2年		吉田が豊橋にかわる	
1872	明治5年	東海道線開通、学制頒布		
1873	明治6年		二川義校分教場設立、養蚕開始	
1874	明治7年		寺子屋廃止	
1878	明治11年		雲谷村、中原村、原村が合併、谷川村となる 谷川学校は谷川村立となる	
1879	明治12年		二川義校原分校開校、製糸業開始、ミカン栽培開始	
1884	明治17年		二毛作始まる	
1887	明治20年		大石社俳句会発足	
1888	明治21年	豊橋駅開業		
1889	明治22年		二川村、大岩村、谷川村が合併、大川村になる	
1890	明治23年	教育勅語発布	谷川学校新校舎完成	
1893	明治26年		大川村が大川町に名称変更	
1894	明治27年		青年夜学会誕生	
1896	明治29年	二川駅開業		
1897	明治30年		大川町から谷川村が分離	
1990	明治33年	改正小学校令公布	夏目彌太郎、谷川村立谷川尋常小学校校長となる (大正5年まで)	
1906	明治39年	豊橋市誕生 (人口37,635人)	大川町・谷川村・細谷村・小沢村が合併、二川町となる	
1908	明治41年		二川町立東部尋常小学校と改名	
1914	大正3年	第一次世界大戦に参加	学校上空を初めて飛行機が飛ぶ	
1923	大正12年	関東大震災		

西暦	年号	日本・豊橋周辺のできごと	谷川校区とその周辺のできごと
1928	昭和3年	初の普通選挙実施	奉安庫完成
1929	昭和4年		開墾助成事業着手
1931	昭和6年	満州事変	
1936	昭和11年	2・26事件起こる	三ヶ日線（のちの二俣線）開通、新所原駅開業
1937	昭和12年	日中戦争	
		国民精神総動員	
1941	昭和16年	太平洋戦争突入	二川東部国民学校となる
1945	昭和20年	太平洋戦争終結	三河地震（昭和19年、20年）豊橋大空襲（6月）
1945	昭和21年	日本国憲法公布 農地改革施行	天皇陛下豊橋へ行幸
1947	昭和22年	6,3制教育実施	渥美郡二川町立二川中学校創設
1948	昭和23年		谷川小学校PTA発足、初代会長河合隆次 二川中学校新校舎完成、二川町農協発足 豊橋市に吸収合併、豊橋市立谷川小学校となる
1955	昭和30年		
1956	昭和31年	東海道線全線電化	
1958	昭和33年		昭和33～36年圃場整備事業施工
1959	昭和34年	伊勢湾台風	
1961	昭和36年	豊川用水工事着工	企業進出が始まる
1963	昭和38年		大脇町、雲谷町地内山林火災
1964	昭和39年	東京オリンピック開催	東海道新幹線開通
1965	昭和40年		谷川小学校鉄筋コンクリート校舎完成
1968	昭和43年		豊川用水通水開始
1969	昭和44年	東名高速道路開通	谷川小学校プール完成
1970	昭和45年	大阪万博開催	普門寺文化財収蔵庫完成 昭和45～52年パイロット事業施行
1972	昭和47年	沖縄本土復帰 第一次オイルショック	二川バイパス開通 谷川保育園開園
1974	昭和49年		
1980	昭和55年	豊川用水東部幹線完成	
1982	昭和57年		普門寺梵鐘復元（昭和18年供出）
1985	昭和60年		上水道完成開通
1989	平成元年	消費税スタート	
1995	平成7年	東京地下鉄サリン事件	農業集落排水事業工事着工（12年供用開始）
1998	平成10年		谷川保育園鉄筋コンクリート園舎完成
2001	平成13年		谷川小学校ホタル園ビオトープ完成
2005	平成17年	愛知万博開催	市内小学校バスケットボール大会谷川小女子優勝
2006	平成18年	豊橋市制100年	豊橋市制100年記念行事： 谷川校区史編集及び記念イベント

参考文献

【全章に関連】

日本史広辞典 (山川出版社)
 豊橋市史 第一巻 (豊橋市)
 第二巻 (豊橋市)
 第三巻 (豊橋市)
 第八巻 (豊橋市)
 谷川の自然と風土

【第1章に関連】

東三河の地学 (愛知県東部地質研究所)
 鳳来寺山自然科学博物館
 豊橋市の山々の地質のようす
 社教50年記念誌 (豊橋市校区社会教育委員会連絡協議会)
 豊橋市行政町別人口表
 国史より見たる豊橋地方
 常盤満作インターネット
 二川の記録史
 妃地竜巻の記録 (豊橋市を襲った黒い渦)
 愛知県史
 愛知県災害史 (愛知県)
 お天気50年 (清水明那)
 震害と震度分布 (愛知県防災会議)
 愛知の百年 (中日新聞社)

【第2章に関連】

豊橋市制八十年史 (豊橋市)
 とよはし (豊橋市立小中学校現職教育委員会)
 とよはしの歴史 (豊橋市)
 ふるさと豊橋 (豊橋市校区社会教育委員会連絡協議会)
 豊橋の文化財 (豊橋文化協会)
 東三河郷土散策 (豊橋地方史研究会)

豊橋の史跡と文化財 (豊橋市教育委員会)
 豊橋自然歩道 (豊橋文化協会)
 豊橋の町名の変遷 (豊橋文化協会)
 豊橋めぐり (東三文化会)
 渥美半島の須恵器窯 (東海文化研究所)
 愛知県遺跡分布図 (愛知県教育委員会)
 東三河の歴史 (東三河高校日本史研究会)
 渥美郡史 (愛知県渥美郡役所)
 たにがわ39年版 (谷川小学校)
 豊橋市南部農協20年史 (豊橋市南部農業組合)
 天竜浜名湖線15年の歩みと二俣線
 中部スローな旅 各駅停車でいこう (山盛洋介)

【第3章に関連】

谷川小学校100年史 (谷川小学校百年史出版委員会)
 学校史「二中30年」
 豊橋の寺宝Ⅱ 普門寺、赤岩寺展
 豊橋教育の源流 (夏目定寛編著)
 谷川保育園入園のしおり平成17年度版
 とよはしの民話
 社寺取調書上扣 (中原村)
 庚申縁記 寛政11年(1799)未8月
 立巖社の由来

校区のあゆみ 谷川

平成18年12月25日発行

編集 谷川校区総代会
 谷川校区史編集委員会
 発行 豊橋市総代会
 印刷 共和印刷株式会社

